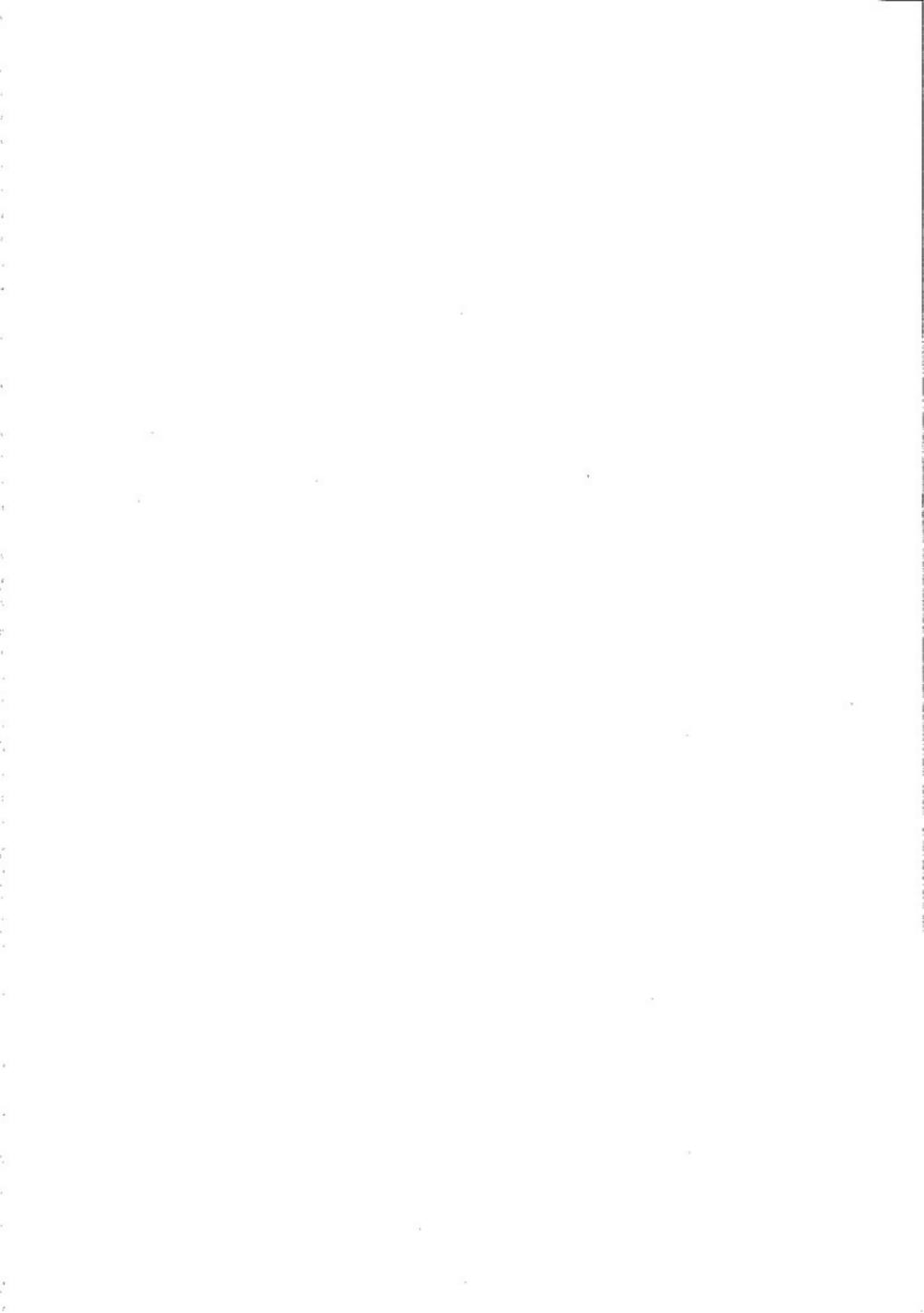


矢 作 遺 跡

第7次調査

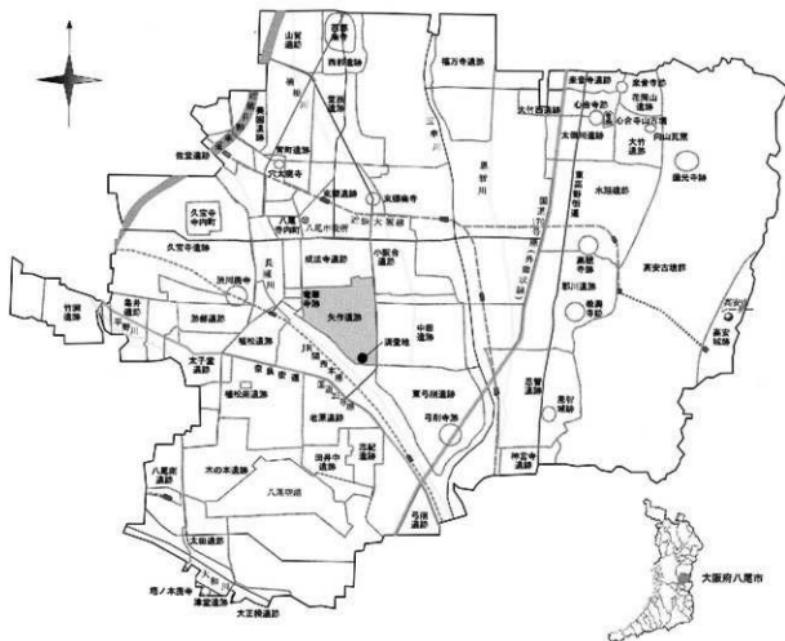
2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



矢 作 遺 跡

第7次調査



2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府東部に位置する八尾市は、河内平野のほぼ中央に位置し、東に生駒山地、南に羽曳野丘陵、西に上町台地の景観をみる地域です。この豊かな自然環境のもとで、古くから人々の生活の場として繁栄していた地域であり、地面の下には、先人達が残した貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。

これらのかけがえのない埋蔵文化財は、地域の歴史と文化を伝える貴重な史料であり、地域の人々の共有の文化遺産であります。開発により消失するこのような埋蔵文化財の記録保存を行うと共に、これらの成果の活用を広く図り、後世に伝えていくことが現代に生きる我々の大きな責務と認識しています。

このたび、平成19年度に実施しました矢作遺跡（第7次調査）の発掘調査の整理が完了致しましたので、報告書として刊行する運びとなりました。矢作遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川と隣接する地域に立地し、河川の氾濫を永く受けながら、弥生時代中期から近世まで連綿と集落が存在してきた遺跡であります。今回の調査地でも、平安前期頃に起きた大規模な河川氾濫後、集落及び連綿と続く耕作地として利用されており、土地利用の変遷を知る上で重要な成果と言えます。

本書が地域史の解明はもとより、埋蔵文化財の保護及び啓発・普及に広く活用して頂ければ幸いです。

最後になりましたが、この発掘調査に対して、ご協力いただきました関係諸機関の皆様方に心より御礼申し上げるとともに、今後、尚一層のご理解とご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

平成20年12月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 岩崎健二

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市安中町八丁目で実施した市営安中住宅4・5・6号館建替えに伴う矢作遺跡第7次調査(YH2007-7)の発掘調査報告書である。
1. 調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成19年12月11日～平成20年2月29日にかけて河村恵理が担当した。調査面積は1104m²である。現地調査においては、赤松英幸・浅井宏美・飯塚直世・伊藤静江・川崎純弘・竹田貴子・田島宣子・中野一博・西出一樹・村井厚三・吉川一榮・和田直樹が参加した。
1. 整理業務は、平成20年7月～12月に実施した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－伊藤・徳谷尚子、遺物・遺構トレース－村井俊子、デジタルトレース－河村、遺物写真－北原清子、遺物写真図版－尾崎良史・北原、遺構写真図版－河村が行った。
1. 本書の執筆・編集は河村が担当した。
1. 測量は富士測量株式会社に委託した。
1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

凡　　例

1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図(昭和61年測量・平成6年修正・平成8年7月編纂)、八尾市教育委員会の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成19年度版)を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準は、T.P.(東京湾標準潮位)である。
1. 本書で用いた方位は、国土座標第VI系(世界測地系)の座標値である。
1. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年期版「新版 標準土色帖」農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所 色票監修に準拠した。
1. 遺構は下記の略号で示した。
井戸 - S E　　土坑 - S K　　溝 - S D　　小穴 - S P　　落ち込み - S O
1. 遺構図面の縮尺は、適宜設定した。
1. 遺物図面の縮尺は、1/4を基本とし、石製品については2/3とした。遺物の断面については、陶磁器・瓦器・土師器・土製品・鉄製品は白、須恵器は黒、灰釉陶器・石器・瓦は斜線、黒色土器は粗い水玉を用いた。土器の施釉部分は細かい水玉を用いた。
1. 土器の形式・編年で基準とした文献については、月次の末尾に提示した。
1. 第1章で参考とした文献についてはP. 3、第4章で参考とした文献についてはP. 44に提示した。

本文目次

はしがき

例言・凡例

第1章 遺跡概要とその環境	1
第2章 調査の方法と経過	8
第3章 調査概要	10
第1節 基本層序	10
第2節 検出遺構と出土遺物	14
(1) 1区	14
(2) 2区	25
(3) 3区	36
第4章 まとめ	43

挿図目次

第1図 調査地周辺位置図	4
第2図 調査地周辺の既往調査成果	7
第3図 調査区配図図	8
第4図 1区南壁断面図	11
第5図 1区第1・2面平面図	12
第6図 1区第3・4面平面図	13
第7図 第1層出土遺物実測図	14
第8図 第2面出土遺物実測図	18
第9図 第4層出土遺物実測図	19
第10図 1317・1318 S P、1319・1320 S K断面図	20
第11図 第5層出土遺物実測図	20
第12図 1406 S K、1407 S E、1417 S D出土遺物実測図	21
第13図 1404～1406 S K断面図	22
第14図 1407 S E平面図・断面図	22
第15図 1509 S D土器出土状況平面図・立面図	23
第16図 1501～1503 S D、1504～1506・1511～1513 S K断面図	24
第17図 1504・1508 S K、1509 S D出土遺物実測図	24
第18図 1508 S K土器出土状況平面図・立面図	25
第19図 第7 b層出土遺物実測図	25
第20図 2区東・北壁断面図	26

第21図	2区第1～3面平面図	27
第22図	第2層出土遺物実測図	28
第23図	2110・2115・2118・2122～2124・2135 S D出土遺物実測図	29
第24図	2120-①S E・2120-②S P平面図・断面図	31
第25図	2139 S K断面図	32
第26図	2206 S K、2207 S O出土遺物実測図	33
第27図	2205・2206 S K、2207 S O断面図	33
第28図	2301～2310・2315 S D出土遺物実測図	35
第29図	2306・2317・2321 S K断面図	35
第30図	3区西・南壁断面図	37
第31図	3区第1～3面平面図	38
第32図	3101・3102 S O、3108 S D出土遺物実測図	39
第33図	3201 S O、3202 S K出土遺物実測図	41
第34図	3202 S K断面図	40
第35図	3301 S O出土遺物実測図	42
第36図	3201・3301 S O断面図	42
第37図	3305 S K断面図	43
第38図	第7 b層出土遺物実測図	43

表 目 次

第1表	周辺の発掘調査一覧表	5・6
第2表	1区第1面耕作溝(S D)法量表	15
第3表	1区第1面土坑(S K)法量表	16
第4表	1区第2面溝(S D)法量表	16
第5表	1区第2面島岸・畦畔法量表	18
第6表	1区第3面耕作溝(S D)・土坑(S K)法量表	19
第7表	1区第4面耕作溝(S D)法量表	21
第8表	2区第1面耕作溝(S D)法量表	29
第9表	2区第2面耕作溝(S D)法量表	33
第10表	2区第3面耕作溝(S D)法量表	34
第11表	3区第1面耕作溝(S D)法量表	40
第12表	3区第2面耕作溝(S D)法量表	41
第13表	3区第3面耕作溝(S D)法量表	42

写 真 目 次

写真1	調査前状況	9
写真2	1区機械掘削状況	9
写真3	1207島畠西肩部断面	17
写真4	1209島畠西肩部断面	17
写真5	1213島畠断面	17
写真6	1214島畠断面	18
写真7	耕作痕跡及び足跡検出状況	19
写真8	1423畦畔断面	23
写真9	噴砂検出状況	28
写真10	2111島畠北壁断面	31
写真11	2116島畠・2208畦畔断面	31
写真12	牛の足跡検出状況	32

図 版 目 次

図版一	調査地遠景
	1区第1面全景
図版二	1区第2・3面全景
	1区第2面1211畦畔検出状況
	1区第2面1213・1214島畠検出状況
	1区第2面宋銭①・1212S P検出状況
	1区第3面1301～1316検出状況
図版三	1区第4・5面全景
	1区第4面1407S E断面
	1区第4面1407S E曲げ物検出状況
	1区調査区南壁断面
	1区東端部下層確認状況
図版四	1区第5面1508SK・1509SD検出状況
	1区第5面1508SK土器出土状況
	1区第5面1509SD土器出土状況
図版五	2区第1・2面全景
	2区第1面2120-①S E断面
	2区第1面2120-①S E木枠検出状況
	2区2139SK断面

- 2区第2面2207S O断面
- 図版六 2区第3面全景
- 2区第3面北半遺構検出状況
- 2区第3面2306S K断面
- 2区調査区東壁断面
- 2区中央部下層確認状況
- 図版七 3区第1面全景
- 3区第2面全景
- 図版八 3区第3面全景
- 3区第2面3201S O獸骨①出土状況
- 3区調査区西壁断面
- 3区調査区南壁断面
- 3区西端部下層確認状況
- 図版九 1区第1層、第2面、第4層、1407S E、1508S K、1509S D出土遺物
- 図版一〇 1区1508S K、1509S D、1504S K
2区第2層、2110S D、2115S D、2207S O出土遺物
- 図版一一 2区2315S D
3区3102S O、3108S D、3201S O、3301S O、第7 b層出土遺物

遺物の参考文献

- 尾上 実・森島康雄・近江俊秀1995「Ⅲ土器・陶磁器 6. 瓦器編」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会
- 九州陶磁近世陶磁学会2000「九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－」
- 古代の土器研究会1993「古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ」
- 古代の土器研究会1994「古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ」
- 古代の土器研究会1996「古代の土器4 煮炊具(近畿編)」
- 篠 弘1992「瓦」「法隆寺の至宝-昭和資財帳-第15巻」法隆寺昭和資財帳編集委員会 小学館
- 立石賢志・鶴柄俊夫1995「Ⅲ土器・陶磁器 10瓦質土器」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会
- 永井久美男1996『日本出土鐵總覽1996年版』兵庫県埋蔵鐵調査会
- 百瀬正恒・近江俊秀1995「Ⅱ各地の土器様相 7. 近畿」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会
- 森 隆1995「Ⅲ土器・陶磁器 2. 黒色土器」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会
- 山下峰司1995「Ⅲ土器・陶磁器 4. 灰釉陶器・山茶碗」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会

第1章 遺跡概要とその環境

矢作遺跡は、大阪府八尾市のはば中央部に位置し、現在の行政区画の高美町三～六丁目、南本町五～八丁目、松山町二丁目、明美町二丁目、安中町六～八丁目一帯をその範囲とし、東西約0.9km、南北約1.0kmに拡がる。

地理的に見ると、当遺跡は東を生駒山地、西を上町台地、南を河内台地、北を淀川に囲まれた河内平野の南東部に位置し、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上の長瀬川の氾濫原に立地する。さらに長瀬川から派生した自然堤防(註1)が、遺跡内中央部を南北方向に伸びるように形成されている。この自然堤防(現地盤T.P.+10.3m)を基点として東西に広く盛土が堆積する(国土地理院1983)。

当遺跡周辺は、弥生時代以降比較的安定した土地であった為、遺跡が特に密集する地域の一つである。当遺跡の北側には成法寺遺跡、北東側には小阪合遺跡、東側には中田遺跡が存在する。

当遺跡は、昭和56年に八尾市教育委員会(以下「市教委」と呼称)によって実施された南本町五丁目の住宅建設に伴う遺構確認調査によって明らかになった遺跡である。当調査では古墳時代・中世の遺構・遺物が確認された(米田敏幸1987)。本格的な調査としては、昭和61年に市教委によって実施された第1図-5調査が最初である。当調査では古墳時代前期の溝、古墳時代後期の掘立柱建物・溝などが検出された。以降、大阪府教育委員会(以下「府教委」と呼称)・市教委・当調査研究会によって数次の発掘調査が行われてきた。

以下、当遺跡周辺地域の既往の調査成果について、時代毎に記述する。なお、当遺跡周辺地域の地理的条件によって、自然堤防上を「A地域」、自然堤防(A地域)より西側部一帯を「B地域」、自然堤防(A地域)より東側部一帯を「C地域」に分類した。A～C地域の範囲は第1図を参照されたい。またゴシック文字で表した囲み文字の算用数字についての詳細は第1表にまとめた。

弥生時代中期では墓域が確認されている。C地域北端部でのみ検出されており、既往調査の希薄な北部(東郷遺跡)側に拡がる可能性が高い。調査成果について見ると、⑩でマウンド上に3基の木棺と2つの甕棺が残る方形周溝墓が検出されている。

弥生時代後期では居住域が確認されている。B地域北部とC地域北部に点在する。調査成果について見ると、B地域の①で多数の小穴・土坑・溝などが検出されており、③・④では完形の遺物が多量に出土した土坑や溝などの祭祀遺構が検出されている。おそらくこれらの調査地が居住域の中でも比較的、集落の中心部より離れた場所にあったものと推測できる。

弥生時代後期末～古墳時代初頭(庄内式期)(第2図-I)では居住域と墓域が確認されている。B地域北部とC地域中部では居住域、C地域北部では墓域と居住域が確認されており、当時期以降、本格的に土地利用され始めたことが分かる。関連する主な調査成果を見ると、B地域北部の④・⑧、C地域中部の⑨・⑩・⑪で土坑・小穴など居住域関連遺構が検出された。C地域北部では⑫・⑭・⑮で溝・土坑など居住域関連遺構が検出された。⑭では調査区北部で井戸・土坑・小穴など居住域関連遺構が検出され、南部で方形周溝墓など墓域関連遺構が検出されている。これらの成果よりC地域北部一帯は、北東側に居住域が集中し、南西部に墓域が拡がる集落が存在していたものと推測できる。

古墳時代前期(布留式期)(第2図-I)では居住域と墓域が確認されている。B地域北部とC地域北部～中央部でそれぞれ遺構が検出されている。関連する主な調査成果を見ると、B地域では、隣接する③と④を合わせて4基の方形周溝墓が検出されている。C地域北部では、⑩・⑪で数棟の堅穴住居が検出されており、隣接する⑫でも8棟以上の堅穴住居・井戸が検出された。なお⑫では墓域関連遺構が検出されており、C地域北部一帯は、東側に居住域、西側に墓域が拡がる集落が存在していたものと推測できる。C地域中部では⑬で検出された溝より銅鏡が出土している。また、⑭では円形周溝墓が確認されており、C地域中部一帯にも集落が拡がっていたと推測できる。弥生時代後期末～古墳時代前期にかけて、集落が北側に集中しており、居住域と墓域の位置関係より、B地域北部、C地域北部、C地域中部の合わせて3つの小規模集落が存在していたものと推測できる。

古墳時代中期～後期(第2図-II)では居住域と墓域が確認されている。B地域北部では墓域と居住域が共に確認されており、C地域でも墓域と居住域が点在するように確認されている。関連する調査成果を見ると、B地域では③で8棟の掘立柱建物がまとめて検出され、⑬でも1棟検出された。なお同調査区に挟まれた④では、円筒埴輪棺が検出され、墓域であった可能性が高いものと推察できる。C地域を見ると、C地域北端部の⑮では堅穴住居・井戸など居住域関連遺構が検出された。これより250m程南下した地点の⑯・⑰では円筒埴輪・朝顔形埴輪の小片が多数出土した周溝が検出されており、墓域が拡がっていたものと推測できる。これよりさらに400m前後南下した地点の⑭・⑯・⑰の調査では溝・小穴などが検出された他、⑯の調査では埴輪や鉄刀などの古墳関連遺物が出土しており、近隣に古墳が存在することが推測できる。⑮の調査では3棟以上の掘立柱建物跡やこれを巡るような三重の溝を検出し、大規模な居館の存在を確認した。溝の廃絶時期(6世紀末)や、近接する矢作神社の存在から、物部氏の居館の存在も示唆される。当該時期で確認した集落群の位置関係が、前述した古墳時代前期以前と一致することから、弥生時代後期末より集落が連続と広がっていたものと推察できる。

奈良～平安時代前期(第2図-III)では居住域と生産域が確認されている。居住域はA地域縁辺部に点在している。関連する調査成果を見ると、A地域縁辺部西側の⑨・⑪・⑫では、掘立柱建物や井戸など居住域関連遺構が検出されている。特筆すべき成果としては、⑫で同一面上に掘立柱建物跡とそれを切るように耕作溝が多数検出されたことである。この調査成果より、比較的短期間で人為的に建物が廃絶され、再び耕作地として利用が始まったことが伺える。不安定な自然環境であったものと考えられる。A地域縁辺部東側の⑭でも、井戸・溝などの居住域関連遺構が検出されている。

以上のようにA地域縁辺部一帯に遺構が集中するのは、A地域一帯が当該時期に河川として機能していたからである。この河川は、古墳時代後期から当該時期に旧大和川の本流の1つであった「矢作ルート」(阪田育功2008)と同一であると考えられる。この為当該時期は、他の時期と比較して遺構の検出数が相対的に少なく、B・C地域においても河川氾濫の影響を大きく受けていることが推察できる。

特筆すべき成果としては、⑯と⑰で確認された自然河川(以下「河川②」と呼称)の中から墨書き土器が出土したことである。以下、河川②の流路について若干の考察を加えたい。墨書き土器が出土した⑰の地点は、A地域を形成した自然河川(以下「河川①」)より若干東寄りに位置す

る。また、河川②が、河川①との間に位置する⑩・⑪では河川堆積層が確認されていないことや、河川堆積の層厚の違いより、⑩→⑫→⑬→⑭→⑮→⑯方向に流れるものと推察できる。

平安時代後期～室町時代(第2図－IV)では居住域と生産域が確認されている。A地域及びA地域からさらに派生した高まり上に居住域が確認されており、BとC地域では生産域が確認されている。A地域(河川①)の埋没時期は平安時代前期頃であり、これ以後安定した土地が続き、広く居住域として利用されていたものと考えられる。関連する調査成果を見ると、A地域北部の⑩・⑪・⑫・⑬・⑭(以下「a地区」と呼称)で土坑・井戸・溝など居住域関連遺構が集中して検出された。これより南南東方向に400m前後地点の⑯～⑰(以下、「b地区」と呼称)で井戸・土坑・小穴・溝などの居住域関連遺構が検出され、⑯で検出された溝は集落を区画する堀の可能性も考えられる。これよりさらに南東方向に500m地点の⑱(以下、「c地区」と呼称)で13基の井戸・3棟の掘立柱建物・池状遺構・溝・土坑など、⑲で小穴・土坑、⑳では井戸、㉑では溝など居住域関連遺構が検出されている。さらに南下したA地域南部の⑩・㉒(以下、「c地区」と呼称)でも掘立柱建物・井戸・土坑などの居住域関連遺構が検出されている。B地域について見ると、㉓・㉔では鋤溝群、㉕・㉖・㉗では井戸・小穴・溝・土坑などが検出され、㉘で検出された溝からは呪付木簡が出土していることから、祭祀などに利用された地域であり、周辺に集落が存在するものと推測できる。C地域では、㉙・㉚・㉛と㉕・㉖で鋤溝群が検出されたが、近接する位置関係から、前者の調査についてはb地区の居住域に関連する生産域、後者の調査についてはA地域b地区の居住域に関連する生産域と推測できる。これらの調査結果より、AとC地域ではあわせて4箇所、B地域では少なくとも1箇所に、集落が存在していたことが示唆できる。

以上、これらの既往の調査結果より、調査地周辺では、弥生時代中期から近世まで連続と集落が存在することは明らかである。特筆すべき点としては、成法寺遺跡から矢作遺跡にかける地域の中央部に、長瀬川の氾濫によって形成された自然堤防(A地域)が形成されていることである。この自然堤防の形成を境に、成法寺から矢作遺跡に見られる集落の分布が大きく変化し、各集落が立地条件の良い場所に移動していったことが推察できる。

註1 (阪田2008)によると、この長瀬川から派生した自然堤防を、1時期に旧大和川の本流の1つと考える「矢作ルート」の存在を示している。

国土地理院1983 「大阪東南部」[1:25,000土地条件図]

米田敏幸1987 「矢作遺跡発掘調査概要」『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告
15 八尾市教育委員会

阪田育功2008 「河内平野における河川形成と流路変遷」『大和川付替えと流域環境』古今書院



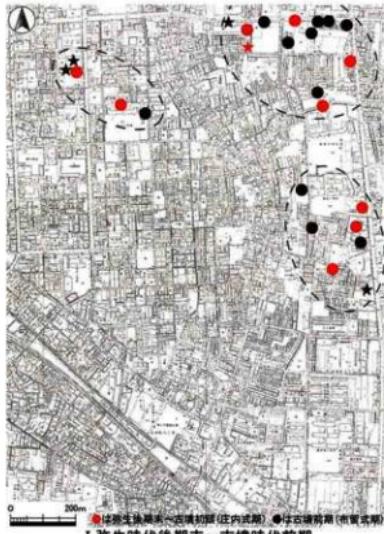
第1図 調査地周辺位置図(S=1/7000)

第1表 周辺の発掘調査一覧表

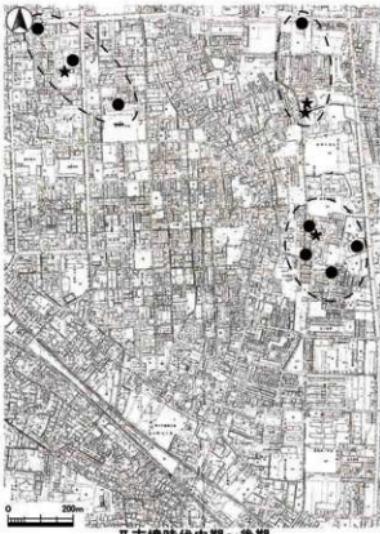
番号	発掘名跡名	所在地 (丁目)	面積 (m ²)	主な調査成果	文献
①	5891-9	光市町1	25	古墳時代後期の溝、平安時代後期の柱穴・土坑	西村公助1993「『X号法皇寺跡第9号西廻』(5891-9)」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書59
②	2007-183	光市町1	12.5	-	佐々木信子2008「2・半成19年度第4・12月の発掘調査」[『八咫市内文化財第19号八坂御厨遺跡古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成19年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
③	1983年度 先市町1	約1900	-	古墳時代後期の解かれた跡地、古墳時代前葉の方形埴輪集落と古墳時代前期の土塁跡	高橋千秋・糸田敏1983「古庄山1号路 -八咫市光市町-」丁字29番地の痕跡】八咫市教育委員会
④	5889-5	先市町1	400	牛の足跡跡、石垣台付近の円筒埴輪跡、古墳時代初期の柱穴跡、古墳時代後期の柱穴跡、古墳時代後期の柱穴跡	川口真一・1992「『法皇寺遺跡第5次調査(5889-5)』平成4年度八咫市文化財調査研究会報告書(1)」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書
⑤	2007-913	透水町1	9	-	川口真一・2008「2・11・22・12月の発掘調査(2007-913)の調査」[『八咫市内文化財第21号八坂御厨遺跡古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成19年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
⑥	2004-330	光市町2	14	-	原田公助2006「3・成田寺奥庭(2004-330)の再調査」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書53 千成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
⑦	5888-17	光市町2	約49	-	高橋千秋2000「『法皇寺遺跡第17号古墳(5888-17)』」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書
⑧	5883-2	透水町2	360	古墳時代後期の孤立柱建物、古墳時代後期の溝、古墳時代後期の土塁跡	高橋千秋1991「『法皇寺第2号古墳(5883-2)』」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書(1)」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書
⑨	5882-1	透水町2	207	古墳時代の孤立柱建物	高橋千秋1991「『法皇寺第2号古墳(5883-2)』」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書(1)」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書
⑩	5891-8	南本町2	約30	奈良時代の溝、舟跡込み	高橋千秋1998「『奈良時代舟跡を含む遺跡(5891-8)』」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書
⑪	5891-7	透水町2	約600	牛の足跡跡、古墳時代の孤立柱建物、井戸、古墳時代後期の溝、土坑	原田真一・1996「『法皇寺第2号古墳(5891-7)』」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
⑫	5883-3	透水町2	812	食糧貯蔵の跡跡・井戸、奈良時代の孤立柱建物、土坑、土岸出土	高橋千秋1991「『法皇寺第3号古墳(5883-3)』」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書(1)」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書
⑬	2004-448	明石町1	18	-	原田公助2006「1・成田寺中庭跡(2004-448)の再調査」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書53 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
⑭	2007-130	明石町1	12.5	-	原田公助2008「2・成田寺中庭跡(2004-448)の再調査」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
⑮	2007-131	明石町1	6.25	-	原田公助2008「2・成田寺中庭跡(2004-448)の再調査」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
⑯	95-1 西型	南本町1	240	牛の足跡・土坑、奈良時代の自然向井(透水八咫市内古跡百選)	川口真一・1997「『法皇寺第1号古墳(95-1)』」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書53 千成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
⑰	2007-32	南本町1	6	鍛金台跡の溝	原田公助2008「2・成田寺中庭跡(2004-448)の再調査」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
⑱	1994年度	南本町1	36	平安後期-鎌倉時代の建物、井戸・溝・土坑	川口真一・1995「『成田寺中庭跡(1994)』」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書53 平成15年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
⑲	JW603-2	東本町1	-	中世の溝、土坑	川口真一・1994「『法皇寺第2号古墳(5891-2)』」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書53 千成15年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
⑳	JW603-1	東本町1	-	中世の井戸・溝、土坑	川口真一・1994「『法皇寺第1号古墳(5891-1)』」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書53 千成15年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉑	90-356	南本町1	約165	-	川口真一・1994「『法皇寺第1号古墳(5891-1)』」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書53 千成15年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉒	2007-286	南本町1	6.25	-	川口真一・2008「2・成田寺中庭跡(2007-286)の再調査」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉓	2002-266	南本町1	9	-	原田公助2005「18・成田寺中庭跡(2002-266)の再調査」[『八咫市内文化財平成16年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書53 平成16年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉔	2004-119	南本町2	8	-	原田公助2005「18・成田寺中庭跡(2002-266)の再調査」[『八咫市内文化財平成16年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書53 平成16年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉕	200207-20	南本町2	22	中世の井戸・溝	原田公助2005「『成田寺中庭跡(2002-20)』」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書53 平成15年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉖	2002-002	南本町2	8	-	原田公助2005「『成田寺中庭跡(2002-20)』」財団法人八咫市文化財調査研究会報告書53 平成15年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉗	2007-137	南本町3	8	鍛冶時代の溝・土坑	原田公助2006「12・2・法皇寺中庭跡(2007-137)の再調査」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉘	5895-15	南本町3	425	中世の井戸・土坑・溝	原田公助2006「12・3・法皇寺中庭跡(5895-15)の再調査」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉙	5894-13	南本町3	約219	中世の井戸・土坑・溝	原田公助2006「12・3・法皇寺中庭跡(5894-13)の再調査」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉚	5890-6	南本町4	168	中世の溝	原田公助2006「12・3・法皇寺中庭跡(5890-6)の再調査」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉛	唐教受6次	南本町1	約400	中世の井戸・土坑	原田公助2006「12・3・法皇寺中庭跡(5890-6)の再調査」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉜	唐教受1次	南本町1	-	中世の井戸跡、占堀時代初期の墓地	高橋千秋1998「『法皇寺中庭跡(5890-6)の調査』」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉝	唐教受2次	南本町1	-	小日の跡、古墳時代初期の立柱跡・竿穴・土坑	高橋千秋1998「『法皇寺中庭跡(5890-6)の調査』」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉞	唐教受2次	-	-	-	原田公助2004「『法皇寺中庭跡(5890-6)の調査』」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉟	唐教受4次	高美町1	130	中世の耕作跡、古墳時代中期の窓穴・住居跡・井戸・溝、古墳時代初期の溝	高橋千秋1998「『法皇寺中庭跡(5890-6)の調査』」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉟-561	高美町1	16.24	-	-	原田公助2004「『法皇寺中庭跡(5890-6)の調査』」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉟	平成4年度	南本町1	-	古墳時代の溝	原田公助2004「『法皇寺中庭跡(5890-6)の調査』」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉟-5	前教受5次	高美町1	360	古墳時代初期の井戸跡・竿戸・井戸、平安時代中期の井戸跡	原田公助2004「『法皇寺中庭跡(5890-6)の調査』」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉟-63	63-035	高美町1	4.08	古墳時代初期の小穴	原田公助2004「『法皇寺中庭跡(5890-6)の調査』」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉟-5884-4	南本町1	50	古墳時代初期の円筒埴輪	高橋千秋1998「『法皇寺中庭跡(5890-6)の調査』」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会	
㉟-94-300	南本町1	63	-	-	原田公助2004「『法皇寺中庭跡(5890-6)の調査』」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会
㉟-32001-18	高美町1	約875	古墳時代初期の井戸・住居跡・溝	原田公助2004「『法皇寺中庭跡(5890-6)の調査』」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会	
㉟-94-189	高美町1	18	古墳時代初期の溝跡込み(多量の古井上跡含む)	原田公助2004「『法皇寺中庭跡(5890-6)の調査』」[『八咫市内文化財平成17年度発掘調査古墳群』]八咫市文化財調査研究会報告書57 平成17年度発掘調査事業書・八咫市教育委員会	

番号	調査名場所	所在地 (丁目)	面積 (m ²)	主な調査成果	文献
④	S895-16	高美町 1	15	-	当社公報1996「[古法中濃跡跡16世紀前(5905-16)]『財団法人八尾市文化財調査研究会報告書』」財団法人八尾市文化財調査研究会
⑤	98-502	高美町 1	12	中世の土坑・落ち込み状遺構・古墳時代初期の小穴・溝	当社公報2000「[古法中濃跡跡16世紀前(5905-16)]『財団法人八尾市文化財調査研究会報告書』」財団法人八尾市文化財調査研究会
⑥	2005-86	高美町 1	9	-	豊岡会報2006「[古法中濃跡跡(2004-445)の調査]」『八尾市内古文化財平成17年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査研究会
⑦	S895-11	高美町 1	約30	古墳時代の土坑	当社公報1994「[古法中濃跡跡]」次回予定(S895-11)「財団法人八尾市文化財調査研究会報告書」財団法人八尾市文化財調査研究会
⑧	S893-12	高美町 1	180	中世の耕作跡・古墳時代の井戸・溝・自然河川上を基盤した耕作跡・古墳時代中期の水路	当社公報1996「[古法中濃跡跡]」次回予定(S893-12)「財団法人八尾市文化財調査研究会報告書」財団法人八尾市文化財調査研究会
⑨	S894-14	高美町 2	124	古墳時代後期～平安時代初期の自然河川・古墳時代中期の水路跡・田園施設・崩壊地形等出土・生糞土代用の埴輪・古墳	当社公報1996「[古法中濃跡跡]」次回予定(94-14)「財団法人八尾市文化財調査研究会報告書」財団法人八尾市文化財調査研究会
⑩	S893-10	高美町 2	約50	縄文以降の耕作跡・古墳時代初期の小穴・土坑	当社公報1994「[古法中濃跡跡]」次回予定(5905-16)「財団法人八尾市文化財調査研究会報告書」財団法人八尾市文化財調査研究会
⑪	S893-19	高美町 2	35	-	当社公報2004「[古法中濃跡跡]」次回予定(S893-19)「財団法人八尾市文化財調査研究会報告書」財団法人八尾市文化財調査研究会
⑫	Y898-5	高美町 3	約4	奈良時代後期～平安時代初期の自然河川	森本めぐみ2003「[古法・作田遺跡なら北河原(1998-03)]」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告書』財団法人八尾市文化財調査研究会
⑬	Y897-220	高美町 3	約20.5	古墳時代前期の土坑	佐庭清一2008「[1-2. 佐庭清一(97-220)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
⑭	T898-6	高美町 3	約23	中世の遺跡・奈良時代後期～平安時代初期の自然河川・古墳時代初期の小穴・土坑・十九	当社公報2000「[古法・作田遺跡]」次回予定(97-23)「財団法人八尾市文化財調査研究会報告書」財団法人八尾市文化財調査研究会
⑮	Y898-66	高美町 3	210	中世の耕作跡・古墳時代後期の孤立した遺物・人漁(物語の記述)の跡・古墳時代初期の土坑(出土)	当社公報2004「[古法・作田遺跡]」次回予定(97-210)「財団法人八尾市文化財調査研究会報告書」財団法人八尾市文化財調査研究会
⑯	Y898-104	高美町 3	8	平安時代後期の小穴	当社公報2007「[古法・作田遺跡(2006-10)]」(現地)「[八尾市内古墳平成16年度地盤調査報告書]」八尾市文化財調査研究会
⑰	Y898-154	高美町 3	1.44	-	当社公報2005「[古法・作田遺跡(2004-154)]」現地)「[八尾市内古墳平成16年度地盤調査報告書]」八尾市文化財調査研究会
⑱	Y893-23	高美町 1	16	-	近江秀喜1991「[1-2. 作田遺跡(97-23)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
⑲	Y891-189	高美町 3	30	中世の土坑・小穴・古墳時代初期の土坑・小穴	酒井一慶1994「[久我山遺跡(189-189)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
⑳	Y897-262	高美町 3	約28	古墳時代初期の小穴・十九	鶴林叶子1998「[久我山遺跡(189-262)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉑	Y898-1	高美町 3	1000	平安時代後期～奈良時代初期の孤立した建物・寺塔跡・土坑・十九、古墳時代初期の遺・古墳時代初期の土坑	当社公報1999「[古法・作田遺跡(98-1)]」(現地)「[八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書]」八尾市文化財調査研究会
㉒	Y899-039	高美町 3	8	-	当社公報1998「[古法・作田遺跡(98-039)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉓	Y897-2	高美町 4	-	奈良時代後期～平安時代初期の自然河川・古墳時代後期の土坑・小穴・土坑・道路・廻刀・古墳時代初期の土坑	柴原俊子2003「[古法・作田遺跡(98-4)]」(現地)「[八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書]」八尾市文化財調査研究会
㉔	Y893-045	高美町 4	4	-	当社公報2003「[古法・作田遺跡(98-4)]」(現地)「[八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書]」八尾市文化財調査研究会
㉕	HE3-078	高美町 4	3	古墳時代初期の円形埋蔵溝	当社公報1999「[古法・作田遺跡(98-3)]」(現地)「[八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書]」八尾市文化財調査研究会
㉖	Y893-119	高美町 4	4.5	--	当社公報1999「[古法・作田遺跡(99-119)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉗	Y890-201	高美町 4	約6	-	当社公報1999「[古法・作田遺跡(99-201)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉘	Y898-306	高木町 6	75	縄文時代以降の神社跡	鶴林叶子1988「[3-6. 作田遺跡(87-306)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉙	Y897-404	高木町 6	25	縄文時代以降の神社跡	鶴林叶子1988「[3-7. 作田遺跡(86-404)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉚	Y893-076	安中町 8	12	中世の自然河川と耕作溝	鶴林叶子1988「[3-8. 作田遺跡(88-076)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉛	Y893-270	高美町 6	16	-	当社公報2004「[古法・作田遺跡(2004-270)の調査]」『八尾市内古墳平成15年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉜	Y898-302	松山町 2	12	中世の自然河川	鶴林叶子1988「[3-9. 作田遺跡(88-302)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉝	Y896-729	松山町 2	8	-	当社公報1997「[古法・作田遺跡(97-729)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉞	Y897-139	松山町 2	2.25	中世の自然河川と耕作溝	鶴林叶子1998「[3-10. 作田遺跡(98-139)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉟	Y890-302	高美町 6	約40	奈良時代の自然河川	鶴林叶子1997「[7. 作田遺跡(97-302)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉟	Y897-218	明光町 2	4	-	当社公報2006「[古法・作田遺跡(2006-218)の調査]」『八尾市内古墳平成15年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉟	Y893-065	高美町 5	8	中世の自然河川	鶴林叶子1997「[8. 作田遺跡(97-65)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉟	Y896-188	安中町 8	16.5	-	鶴林叶子1997「[8. 作田遺跡(97-188)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉟	Y890-72	安中町 8	2	-	当社公報1999「[8. 作田遺跡(99-72)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉟	Y896-313	南木町 3	8	縄文時代の土坑・平安時代の上坡	吉田森子1996「[4. 作田遺跡(96-313)の調査]」『八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書』八尾市文化財調査研究会
㉟	Y896-3	南木町 5	約285	縄文時代の孤立した柱跡・井戸・土坑・平安時代初期の築堤跡・水路	鶴林叶子2004「[古法・作田遺跡(94-3)]」(現地)「[八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書]」八尾市文化財調査研究会
㉟	Y896-4	本町 5	約276	縄文時代の孤立した柱跡・井戸・土坑・土坑・平安時代初期の築堤跡・水路	鶴林叶子2004「[古法・作田遺跡(94-4)]」(現地)「[八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書]」八尾市文化財調査研究会
㉟	Y890-1	高光町 2	200	縄文時代の耕作跡・平安時代初期の井戸・土坑	鶴林叶子2004「[古法・作田遺跡(94-1)]」(現地)「[八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書]」八尾市文化財調査研究会
㉟	Y893-3	高光町 2	約170	平安時代後期～室町時代の井戸・上坡・小穴・溝	鶴林叶子1999「[2. 作田遺跡(99-3)]」(現地)「[八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書]」八尾市文化財調査研究会
㉟	Y890-1	高光町 2	200	京町時代の溝	鶴林叶子1999「[2. 作田遺跡(99-1)]」(現地)「[八尾市内古墳平成9年度地盤調査報告書]」八尾市文化財調査研究会

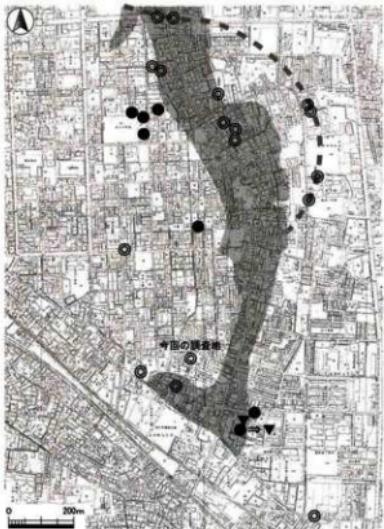
SK-JNG: 成田寺遺跡 TM: 矢作遺跡 RM: 鹿鳴寺跡、府蔵委: 大阪府教育委員会



I 弥生時代後期末～古墳時代前期



II 古墳時代中期～後期



III 奈良時代～平安時代前期



IV 平安時代後期～室町時代

●居住域 ★墓域 ▼生産域 ◎河川(自然堤防を形成している) ■■■河川①、■■■河川②の範囲を表す

第2図 調査地周辺の既往の調査成果(S=1/15000)

第2章 調査の方法と経過

今回の調査は、市営住宅建替えに伴って行われたもので、建物本体の基礎部分に2箇所、浄化水槽設置部分に1箇所の合計3箇所に調査区を設定し、調査を行った。調査地総面積は約1104m²である。

調査区は、建物本体部の北西側から順に「1・2区」、南側の浄化水槽設置部を「3区」と呼称した。なお、1・2区については、既往建物の基礎杭や、これらの解体作業により攪拌されており、1区は北東側一帯、2区は南側の大部分が搅乱であった。ただし一部、破壊の及ばない箇所が残ることから、搅乱部分も慎重に調査を行った。

各調査区の平面形状と規模は、1区は北西-南東方向に長辺をもつ長方形を呈し、北西部と南東部の2箇所に突出部がある。面積は約487m²を測る。2区は北西-南東方向に長辺をもつ長方形を呈し、北東部と南東部の2箇所に突出部がある。なお、調査設計当初、南西部に一箇所1×2mを測る突出部を設定していたが、既往建物による破壊が想定できたので、市教委との協議の上、調査は行わなかった。面積は約513m²を測る。3区は北西-南東方向に長辺をもつ長方形を呈し、面積は約103m²を測る。

地区割については、調査地の中央北寄りに、国土座標第VI系（世界測地系）の通る基準点（X=-153.400、Y=-36.300）を基点とし、地区名を東西方向はアルファベット（西からA～J）、南北方向は算用数字（北から1～10）で示し、地区の表示は1A～10J地区と呼称した。

掘削は、重機による機械掘削と、人力掘削によって行った。現地表（T.P. +10.8m）下0.8～1.2

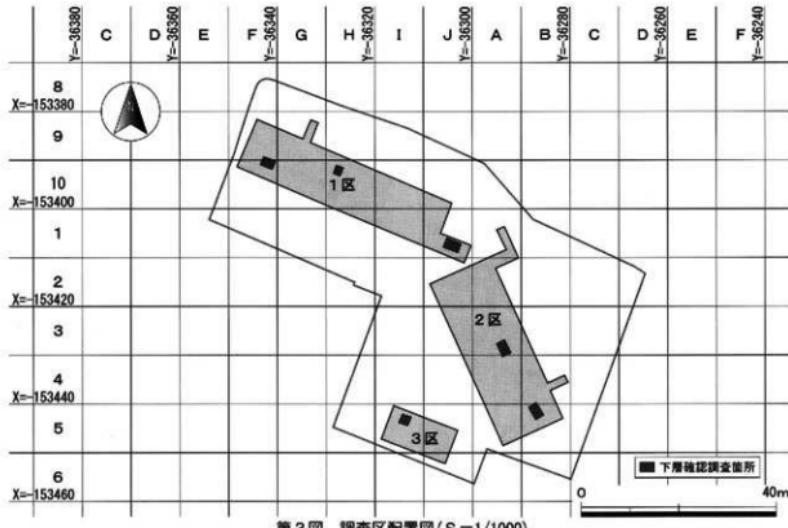




写真1 調査前状況(南東から)



写真2 1区機械掘削状況(西から)

m前後を機械掘削、以下の0.2~1.2m前後までを人力掘削した。平面調査終了後、各調査区内において1~3箇所(約2.5m四方)を、深さ約1.0mまで機械と人力掘削を併用して下層確認調査を行った。1区については、旧耕作土層を除去する程度で、機械掘削を終了し、人力掘削により慎重に調査を進めた結果、さらに下層部が機械掘削可能であることが判明した為、2・3区ではさらに深くまで機械掘削を行った。

調査は、2007年12月11日に着手し、1区から開始した。1区は2008年1月21日に下層確認調査を終了し、埋め戻しを開始。1区埋め戻し終了後の2月25日より、2区の調査を開始した。3区については、2区の進歩状況に合わせて、2月6日より並行して調査を行った。2区は2月21日に下層確認調査を終了し、埋め戻しを開始。3区は2月28日に下層確認調査を終了し、2月29日をもって全ての調査を完了した。

遺構面は、調査の結果、1区では第1面で近世以降、第2面で近世、第3面で中世以降、第4面で中世及び古代の遺構群を検出した。2区では第1面で近世以降、第2面で近世、第3面で中世以降の遺構群を検出した。3区では第1面で近世以降、第2面で中世以降、第3面で中世の遺構群を検出した。

遺構番号は調査区ごとに付け、前一桁で調査区、次の二桁で遺構面、ただし1区第4面に関しては調査の都合上さらに2面(4・5)に細分、後二桁で通し番号を示す。遺構名は「遺構番号」+「遺構略号」で表示した。なお、今回の調査地が中世～近世の生産域が重層的に続く地域であり、広く下層部の削平が及ぶことから、同一検出面上で、時期の異なる遺構が多数混在していた。この為、整理作業時に再度、遺構埋土及び出土遺物の特徴より、遺構時期の整理を行った。

第3章 調査概要

第1節 基本層序

今回の調査地は、近世以降の耕作や旧市営住宅建物の建築・解体等によって、調査地全体の地層は広い範囲で削平及び攪拌されていた。当調査で確認できた現地表下2.5mのうち、現地表下1.0~1.4mまでは近世以降に堆積した土層が占め、中世~古代の包含層は層厚0.1~0.2m前後であった。

1~3区について比較したところ、1区に比べて2・3区の中世~古代に相当する堆積層や遺構の残存状況が希薄であった。おそらく、調査地西地点(1区南西端)と調査地東地点(2区南東端)の中世堆積層(第5層)上面の高低差が約0.3mに及ぶことから、標高地の高い南東側の調査区(2・3区)で特に、近世以降の土地利用による削平が顕著に表れているものと言える。以下、各層の特徴を記す。

第0層:既往建物の建築・解体に伴う盛土・攪乱層。解体に伴う攪乱層は、1区では北東側一帯に集中する。浅い部分ではベース面の第7b層上面で収束するが、調査区中央部を南北に並列する既往建物の基礎杭や北端の旧防火水槽部の破壊深度は深く、第7b層にまで達する。2区南東隅でも既往建物の基礎杭が東~西に並列し、破壊深度は第7b層まで達する。

第1層:旧耕作土層。旧市営住宅建築(昭和40年代)直前の堆積。上部が旧市営住宅建築時の整地土に覆われていた為、畦畔の痕跡が顕著に残る。当該層の堆積は、調査地全体に認められた。層厚0.04~0.2mを測る。土質は黒色粗砂混中~細砂に径0.5cm大の礫が多量に混じる。調査地一帯は広く耕作地として利用されていた。

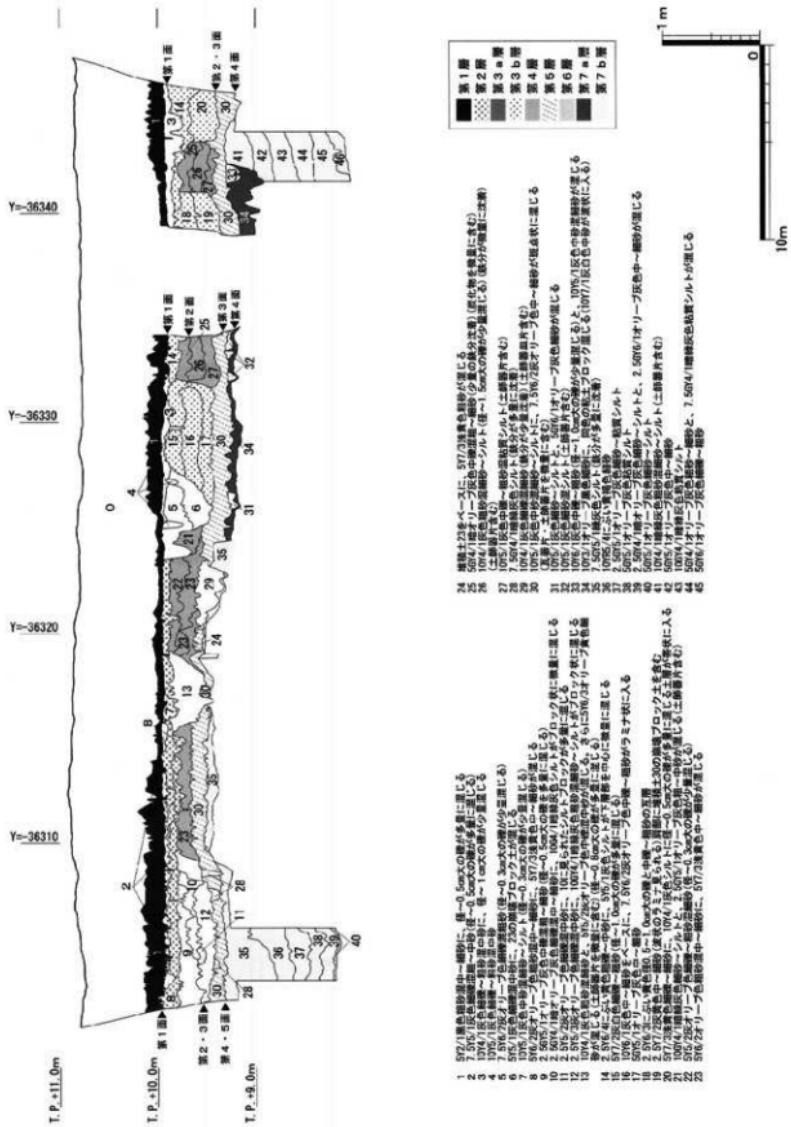
第2層:近世以降耕作土層。土質は灰色細礫~シルトに径0.5~1.0cm大の礫が少量混じる。当該層上面と下面で近世以降の耕作溝を多数検出した。

第3a層:近世耕作土層。土質は灰色礫混中砂である。2・3区に堆積が見られることから、調査地の東側を中心に近世耕作地が広がっていたものと推察できる。島畠間を埋めるように堆積しており、水田などの耕作地として利用されていたものと考えられる。

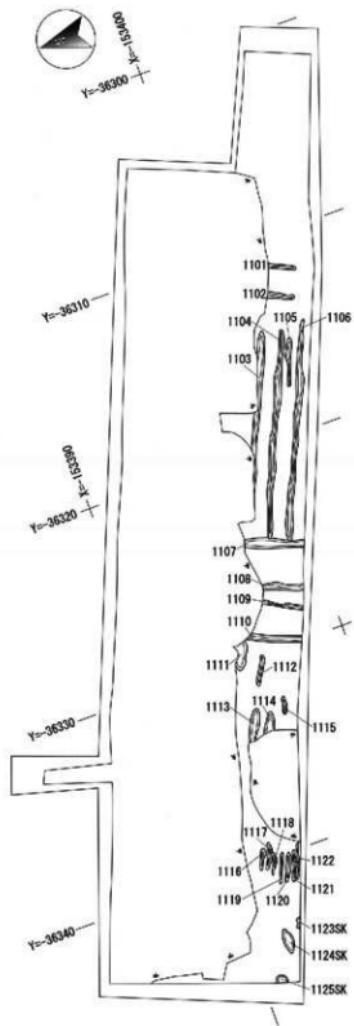
第3b層:島畠埋没時の氾濫堆積土層。土質はにぶい黄色粗礫~中砂に、灰色シルトを巻き上げる。1区の北半部では、層厚0.5mに及び、さらに2層に細分できる。上部は葉理が見られない堆積層であるが、下部は水平方向の葉理が顕著に見られる堆積層であった。以上のことから、少なくとも2度の洪水によって堆積したものと推測できる。当該層の堆積は、前述した1区北半部で顕著に見られ、2区や3区では島畠間に薄く堆積するに留まる。以上のことから、1区北半周辺を中心に流路の氾濫が生じたものと推測できる。

第4層:島畠造成土層。土質は灰オリーブ色粗砂混中~細砂に浅黄色中~細砂が混じる。各調査区で堆積が見られ、調査地全体に島畠が広がっていたことが推測できる。

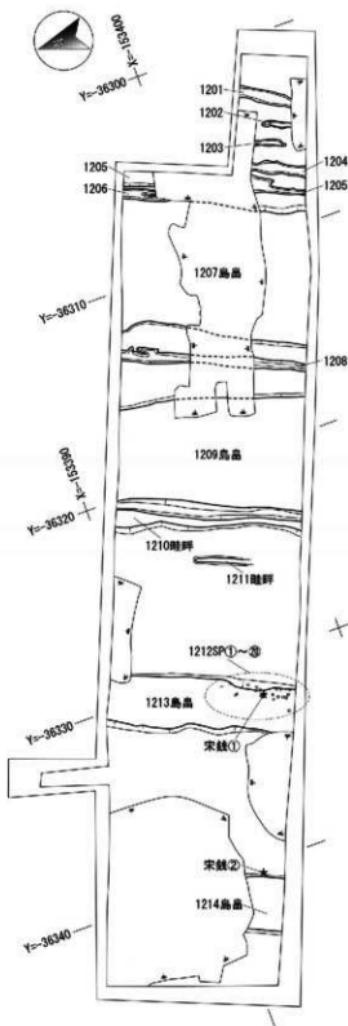
第5層:水田耕作土層①。土質は灰色中砂混細砂~シルトに灰オリーブ色中~細砂が斑点状に混じる。各調査区で堆積が見られ、調査地全体に耕作地が広がっていたことが推測できる。



第4図 1区南壁断面図(S-垂直:1/50、水平:1/250)



第1面



第2面

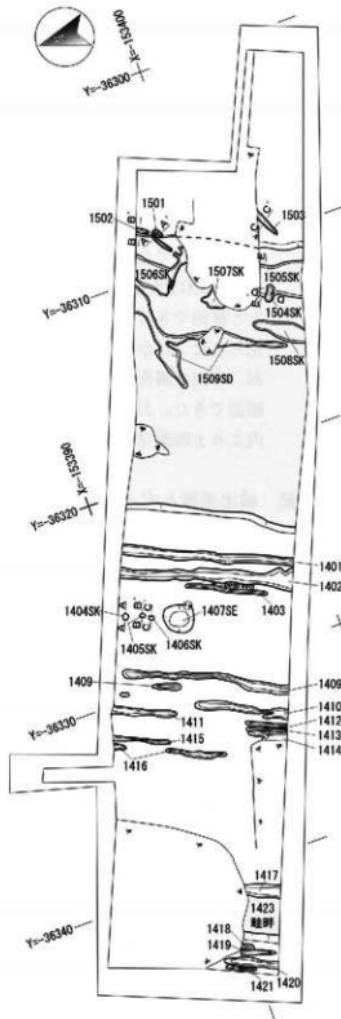
*造構名のうちSDについては造構略号省略

第5図 1区第1・2面平面図 (S=1/250)





第3面



第4面



※道標名のうちSDについては道横路号省略



第6図 1区第3・4面平面図 (S=1/250)

第6層：畦畔状の高まりを構築する土層。中世以降の土地利用によって削平され、2区の一部のみ確認できた。

第7a層：水田耕作土層②。土質は暗緑灰色粗砂混細砂～シルトである。当該層の堆積は1区北半のみで確認できたことから、地形的に下がっている土地を利用した水田であったものと推測できる。

第7b層：自然堆積層。下層確認調査より厚層1.0m以上の堆積が確認できた。土質は緑灰色シルトである。当該層の堆積は、調査地全域で確認できた。前章で述べた自然堤防が形成された時期に相当する。時期は奈良時代以降に比定できる。当該層はT.P.+9.5m前後に堆積しており、西側に若干下がっている。1区中央部では、当該層上面で古代の遺構(1500番台遺構)を検出したが、埋土の状況より、本来の遺構構築面は上層部であったと推測できる。1区東端では当該層上部に酸化鉄及び二酸化マンガン斑紋が顕著に見られたことから、この箇所では、これらの遺構はなんらかの影響を受けている。なお、今回の調査では当該層を母材とする土壤化層(第7a層)の堆積は1区西側のみで確認できた。おそらく上層による攪拌が著しい為、削平されたものと考えられる。層内より土師器甕(8世紀後半)が数点出土した。

第2節 検出遺構と出土遺物

(1) 1区(第4～6図)

9F～2J地区に位置し、東西43.33m×南北10.49mを測る長方形に、北壁面からのびる東西1.4m×南北4.4mを測る突出部、東壁面からのびる東西6.6m×南北4.0mを測る突出部を持つ調査区を設定した。当調査区の面積は約487m²を測る。

調査は、現地表面(T.P.+10.7～11.0m)から約0.7～0.8mまで機械掘削し、人力掘削を約0.5～0.6m地点まで行った。なお、調査終了後、調査区東端部と西端部の2箇所で機械掘削により深さ1.0m(T.P.+8.0m前後)までの下層部を確認した。

・第1層出土遺物(第7図-1)

当該層中に包含する遺物の大半は、碎片であった。図化した1は、第1面遺構検出時(第4図-5・6層掘削時)に出土した遺物であり、近世の棟瓦である。凹面の両側縁に継ぎが見られる。瓦当面の文様は、小型宝珠文を中心飾りとする均整唐草文が施される。



第7図 第1層出土遺物実測図(S=1/4)

・第1面(第5図、図版一)

第0層の盛土と第1層の旧耕土を除去したところ、第1層下面で近世以降の耕作溝群22条(1101～1122SD)、土坑3基(1123～1125SK)を検出した。現地表面下約1.0m(T.P.+10.0m)地点に広がる。調査区北半部では、後世の土地利用によって広く破壊されており、遺構を検出すること

はできなかった。南半部で検出された遺構は、調査区下面に拡がる島畠が、第3b層によって埋没した後に構築されてから、旧市営住宅建築以前まで存続していたものと推測できる。遺構は、埋土の特徴や遺構の切り合い関係によって、少なくとも2時期に分類できる。当該面で検出された耕作溝・島畠は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20°それぞれ傾きをもつ。

以下、当該面を「第1面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

溝(S D)

1101・1102 S D (第2表)

調査区1H地区で検出した耕作溝群である。ともに10Y4/1暗オリーブ灰色細礫混粗～中砂の単一層の埋土をもち、全て南北方向に並列する。遺物は各溝から瓦器・須恵器・土師器の碎片が出土した。

1103～1106 S D (第2表)

調査区10H・Iと1I地区で検出した耕作溝群である。ともに10Y4/1灰色細礫～粗砂混中～細砂の単一層の埋土をもち、全て東西方向に並列する。遺物は各溝から国産陶磁器・瓦質土器・土師器(擂鉢など)、近世平瓦の碎片が出土した。当該溝群のうち1104・1106 S Dが、1107 S D埋没後に構築されていることから、当該溝群の西側に並列する耕作溝群より新しい時期に相当することが推察できる。

1107～1110 S D (第2表)

調査区10H地区で検出した耕作溝群である。ともに5Y5/1灰色細礫～粗砂混中砂の単一層の埋土をもち、全て南北方向に並列する。遺物は各溝から土師器の碎片が出土した。

1111～1115 S D (第2表)

調査区10G・H地区で検出した耕作溝群である。ともに5Y4/1灰色細礫混粗～中砂の単一層の埋土をもち、全て東西方向に並列する。遺物は各溝から瓦質土器・土師器の碎片が出土した。

1116～1122 S D (第2表)

調査区10F・G地区で検出した耕作溝群である。ともに5Y5/1灰色中砂混細砂～シルトの単一層の埋土をもち、全て東西方向に並列する。遺物は各溝から土師器の碎片が出土した。

第2表 1区第1面耕作溝(S D) 法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
1101 S D	1 I	(1.43)	0.24	8.2	1112 S D	10G	1.62	0.24	3.9
1102 S D	*	(1.38)	0.23	*	1113 S D	*	(1.72)	0.45	3.8
1103 S D	10H・I、1I	(8.72)	0.38	10.0	1114 S D	*	(0.98)	0.48	6.9
1104 S D	*	10.65	0.32	12.1	1115 S D	*	0.94	0.20	8.2
1105 S D	1 I	2.52	0.26	11.3	1116 S D	10F・G	1.10	0.25	8.1
1106 S D	1 H・I、10H	11.35	0.38	10.7	1117 S D	*	1.40	*	7.2
1107 S D	10H	(3.00)	0.57	16.2	1118 S D	*	(1.22)	0.20	6.5
1108 S D	*	(2.15)	0.52	16.5	1119 S D	*	1.58	0.18	5.8
1109 S D	*	(2.10)	0.22	11.3	1120 S D	10F	*	0.28	5.6
1110 S D	*	(2.77)	0.30	18.0	1121 S D	10F・G	1.65	0.20	4.2
1111 S D	10G・H	(1.55)	0.68	9.0	1122 S D	*	1.90	0.10	8.2

*()内数値は検出長及び検出幅 *表記の数値は最大値

土坑(S K)

1123~1125 S K (第3表)

調査区10F地区で検出した。埋土は前述の1116~1122 S D埋土と類似しており、同一時期の遺構であったものと推測できる。遺物は各土坑から土師器の碎片が出土した。

第3表 1区第1面土坑 (S K) 法量表

遺構名	地区	平面形	径(cm)	深さ(cm)
1123 S K	10F	-	58×(13)	14.0
1124 S K	〃	楕円形	130×53	10.0
1125 S K	〃	-	60×(42)	6.2

* ()内数値は検出径 * 表記の数値は最大値

・第2面(第5図、図版二)

第2層の近世以降の耕作土と、第3 b層の氾濫堆積土を全て除去したところ、第4層上面で近世の島畠(1207・1209・1213・1214島畠)、耕作溝群7条(1201~1206・1208 S D)、畦畔(1210・1211畦畔)、杭跡20基(1212 S P①~⑩)を検出した。現地表面下約1.1m(T.P.+9.9m)地点に広がる。当該面で検出された島畠・耕作溝・畦畔は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南20° それぞれ傾きをもつ。当該遺構面は調査区北東半部を中心に以前として後世の攪乱がおより、島畠造成土及び畦畔が一部削平される。

以下、当該面を「第2面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

溝(S D)

1201~1206 S D (第4表)

調査区1・10 J地区で検出した耕作溝群である。1201 S Dは2.5GY5/1オリーブ灰色中礫混粗~細砂、1202~1206 S Dは2.5Y4/1オリーブ灰色細礫混中~細砂に10GY4/1暗緑灰色シルトがブロック状に混じる単一層の埋土をもち、全て南北方向に並列する。埋土の特徴などから、1201 S Dが若干新しい時期の遺構であることが

第4表 1区第2面溝 (S D) 法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
1201 S D	1 J	(2.70)	0.70	8.3
1202 S D	〃	(1.50)	0.30	8.2
1203 S D	〃	(1.20)	0.30	4.5
1204 S D	〃	(2.70)	0.70	5.3
1205 S D	1・10 J	(4.10)	0.70	9.3
1206 S D	10 J	(2.30)	0.30	11.10
1208 S D	1・10 I	(9.25)	0.80	15.5

* ()内数値は検出長及び検出幅 * 表記の数値は最大値

推定できる。遺物は各溝から瓦器・土師器などの碎片が微量に出土した。

1208 S D (第4表)

調査区1・10 I地区で検出した。当該溝は第4図-13層を除去したところ最下部で検出した。南北方向にのび、13層をベースとして、これに5Y6/3オリーブ黄色細砂が混じる単一層の埋土をもつ。排水路の役割を持つ溝である可能性が高く、13層堆積時に埋没したものと考えられる。遺物は、瓦質土器・須恵器・土師器の羽釜などの碎片が微量に出土した。

島畠(島畠)

1207島畠(写真3)

調査区1 H・Jと10 I・J地区で検出した。南北方向にのびる。当該島畠造成土の上部にあたる部分は、後世の耕作地などの土地利用により削平及び攪拌されており、本来の規模は不明である。唯一、残存する造成土1207-①を観察した結果、氾濫堆積物の堆積ではなく、人為的な攪拌の

痕跡が顕著に見られることから、水田耕作土であると推察できる。遺物は中世の平瓦・瓦器・須恵器・土師器の碎片を包含する。

1209島畠(写真4)

調査区1H・Iと10H・J地区で検出した。南北方向ものびる。当該島畠造成土の上部は、後世の耕作地などの土地利用により搅拌されており、本来の規模は不明である。残存する造成土1209-①～③を観察した結果、氾濫堆積物などによる堆積ではなく、人為的な搅拌の痕跡が顕著に見られることから、水田耕作土であると推察できる。遺物は、1209-①は国産陶磁器・瓦器・土師器の播鉢などの碎片、②・③は国産陶磁器・中世の瓦・土師器・須恵器などの碎片を包含する。

以上より、残存する3層の造成土は、近世以降に堆積したもので、時期差はほとんどないものと考えられる。また、土質の特徴や堆積の標準値などから1209-②と1207-①は同一層である可能性が高いと考えられる。

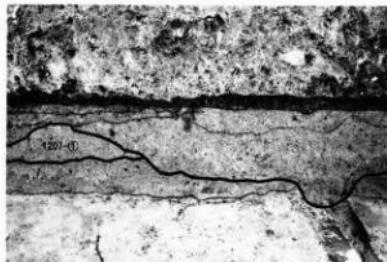
1213島畠(第8図-2、写真5)

調査区1H・Iと10H・I地区で検出した。南北方向にのびる。残存する造成土1213-①～③を観察した結果、氾濫堆積物の堆積ではなく、人為的な搅拌の痕跡が顕著に見られることから、水田耕作土であると推察できる。1213-①上面では径10cm前後の杭跡(1210S P①～⑩)が20個検出した。また周辺では、2の宋銭(「祥符元寶」推定)も出土した。遺物は1213-①は国産陶器・青磁・瓦質土器・須恵器・土師器の碎片、1213-②は青磁・瓦・瓦質土器・須恵器・土師器の碎片、1213-③は平瓦・瓦器・土師器(皿など)の碎片を包含する。

1214島畠(第8図-3、写真6)

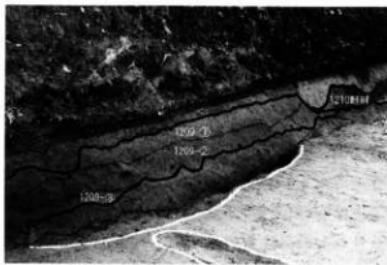
調査区1H・Iと10H・I地区で検出した。南北方向にのびる。残存する造成土1214-①～③を観察した結果、氾濫堆積物の堆積ではなく、人為的な搅拌の痕跡が顕著に見られた為、水田耕作土であると推察できる。

遺物は、1214-①は青磁・土師器の碎片、1214-②は瓦器・土師器の碎片、1214-③は土師器・



1207-①: 576/2オリーブ色培養土に埋め置かれており、577/2黒色土へ移行が認められる

写真3 1207島畠西肩部断面(北から)



1209-①: 571/1オリーブ色培養土へ埋め置かれており、572/2黒色土へ移行が認められる

1209-②: 571/2黒色土へ埋め置かれており、572/3黒色土へ移行が認められる

1209-③: 572/3黒色土へ埋め置かれており、573/2黒色土へ移行が認められる

写真4 1209島畠西肩部断面(北から)



1213-①: 564/1黒ナリーブ色培養土へ埋め置かれており、565/2黒色土へ移行(少部分)する(土師器片含む)

1213-②: 564/2黒ナリーブ色培養土へ埋め置かれており、565/3黒色土へ移行(少部分)する(土師器片含む)

1213-③: 565/3黒色土へ埋め置かれており、566/1黒色土へ移行(少部分)する(土師器片含む)

写真5 1213島畠部断面(北東から)

須恵器の碎片を包含する。東肩肩部では、3の宋銭「明道元寶(北宋1032年)」が出土した。出土状況から耕作時に混在したものと推測できる。

以上より、残存する3層の造成土は、中世～近世期に堆積したものと考えられる。また、土質の特徴や堆積の標高値などから1213-①～③と1214-①～③はそれぞれ同一層である可能性が高いと考えられる。

畦畔(畦畔)

1210畦畔(第5表、写真4)

調査区1・10H地区で検出した。島畠と同様に、南北方向にのびる。当該畦畔は氾濫堆積物の第4図-5・6層を全て除去したところ検出できた遺構であり、1209島畠造成時、もしくは造成後に構築されたものと推察できる。当該畦畔造成土を観察した結果、單一層で構築され、遺物は陶器(人形)・瓦器・土師器(羽釜など)や獸骨などの碎片を包含する。近世以降に造成されたものと推察できる。

1211畦畔(第5表)

調査区10H地区で検出した。南北方向にのびる。1210畦畔同様に、氾濫堆積物を全て除去したところ検出できた遺構であるが、やや削平されており、全形は確認できなかった。造成土は1210畦畔と同様の特徴をもつことから、同時期の畦畔であると推察できる。遺物は出土しなかった。

第5表 1区第2面島畠・畦畔法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	高さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	高さ(cm)
1207 島畠	1 H・J、10 I・J	(2.70)	0.70	8.3	1214 島畠	1 H・I、10 H・I	(2.70)	0.70	5.3
1209 島畠	1 H・I、10 H・I	(1.50)	0.30	8.2	1210 畦畔	1・10H	(4.10)	0.70	9.3
1213 島畠	〃	(1.20)	0.30	4.5	1211 畦畔	10H	(2.30)	0.30	11.10

* ()内数値は検出長及び検出幅

* 表記の数値は最大値

小穴(S P)

1212 S P ①～②

調査区10G地区で検出した杭跡群で、20個検出した。平面形態は全て円形であり、直径0.1m前後を測る。護岸等の役割を持つ杭跡である可能性が高い。氾濫堆積物の第4図-14・15層によって一気に埋没したものと考えられる。遺物は出土しなかった。

・第4層出土遺物(第9図-4)

当該層中に包含する遺物の大半は碎片であった。図化した4は第3面遺構掘削時(1214島畠造

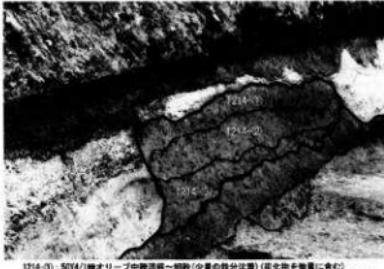


写真6 1214島畠部断面(北東から)



第8図 第2面出土遺物実測図 (S=1/1)

成土を掘削時)に出土したサヌカイト製の剥片である。重さ12.75gを測る。a面は端部に微細な剥離痕が見られ、b面の打面は单剥離打面である。端部や調整が非常に摩滅しており、ローリングを受けたものと考えられる。

・第3面(第6図、写真7、図版二)

第4層の島畠構築土を全て除去したところ、第4層下面と第5層上面で、中世以降の耕作溝13条(1301・1305~1316SD)、土坑5基(1302~1304・1319・1320SK)、小穴2個(1317・1318SP)を検出した。現地表面下約1.2~1.4m(T.P.+9.3~9.8m)地点に広がる。当該遺構面は調査区西半部においては畦畔などの痕跡は残存しなかったが、無数の耕作痕跡及び足跡が認められたことから、水田跡である可能性も考えられる。当該面で検出された耕作溝は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20°それぞれ傾きをもつ。

以下、当該面を「第3面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

溝(SD)

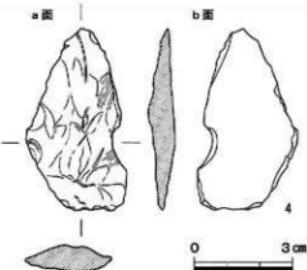
1301・1305~1316SD(第6表)

調査区1J地区で検出した耕作溝群である。ともに10Y5/1灰色中砂混細砂~シルトに7.5Y6/2灰オリーブ色中~細砂が斑点状に混じる単一層の埋土をもち、全て南北方向に並列する。遺物は、各溝から瓦質土器(擂鉢)・土師器等の碎片が出土した。

土坑(SK)

1302~1304SK(第6表)

調査区1J地区で検出した耕作関連の痕跡である。ともに10Y5/1灰色中砂混細砂~シルトに7.5Y6/2灰オリーブ色中~細砂が斑点状に混じる単一層の埋土をもつ。遺物は出土しなかった。



第9図 第4層出土実測図(S=2/3)

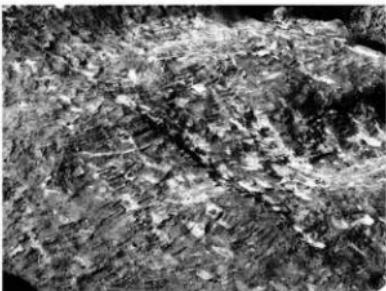


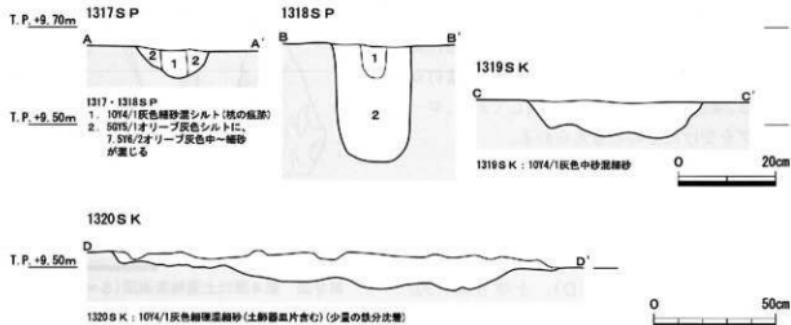
写真7 耕作痕跡及び足跡検出状況(北東から)

第6表 1区第3面耕作溝(SD)・土坑(SK)法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
1301 SD	1J	(2.57)	0.20	2.8
1305 SD	※	(2.58)	0.67	2.0
1306 SD	※	(2.72)	0.83	2.2
1307 SD	※	(2.44)	0.52	1.9
1308 SD	※	2.18	0.24	3.3
1309 SD	※	(2.33)	0.23	1.1
1310 SD	※	(2.31)	0.28	3.1
1311 SD	※	(1.28)	0.18	2.1
1312 SD	※	1.19	0.18	2.4
1313 SD	※	(1.07)	0.12	2.5
1314 SD	※	1.52	0.20	7.0
1315 SD	※	0.97	0.14	2.4
1316 SD	※	0.84	0.21	5.6
遺構名	地区	平面形	径(cm)	深さ(cm)
1302 SK	10J	楕円形	2.8×1.7	5.6
1303 SK	※	不定形	2.2×1.4	1.1
1304 SK	※	楕円形	1.2×1.2	2.8

* ()内数値は検出長及び検出幅及び検出深

*表記の数値は最大値



第10図 1317・1318 S P、1319・1320 S K断面図

1319 S K (第6・10図)

調査区10H地区で検出した。単一層の埋土をもつ。遺物は出土しなかった。

1320 S K (第6・10図)

調査区1 H地区で検出した。当該土坑は調査区南側から調査区外にさらに広がる遺構で規模は不明である。遺物は出土しなかった。

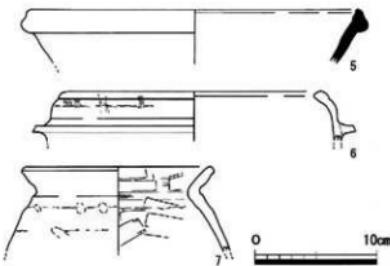
小穴(S P)

1317・1318 S P (第6・10図)

調査区10 I地区で検出した。埋土を半裁掘削したところ、柱の痕跡が一部見られることから、ともに杭跡の可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

・第5層出土遺物(第11図-5～7)

当該層中に包含する遺物の大半は碎片であった。図化した5～7について記述したい。5・6はとともに第5層掘削時(1400番台遺構検出時)に出土した。5は須恵器の片口鉢で、上下に拡張する口縁端部をもつ。内外面に回転ナデの痕跡が残る。時期は12世紀末～13世紀初頭に比定できる。6は土師器の羽釜で、復元口径20.5cm、残存器高4.0cmを測る。内湾する口縁部をもち、時期は12世紀後半に比定できる。7は第5層掘削時(1500番台遺構検出時)に出土した土師器の壺である。出土地点が10 I地区であり、当該層中の下部より出土したことから、後述する当該層下面(第4面)で検出した1509 S Dに伴う遺物の一つであると推測できる。復元口径15.2cm、残存器高7.2cmを測る。形態は、頸部に後線が見られ、口縁部は肥厚する。調整は、内面に横方向の板ナデが顕著に見られ、粘土紐接合のち指押さえの痕跡が確認できる。時期は9世紀後半～10世紀初頭に比定できる。



第11図 第5層出土遺物実測図(S=1/4)

・第4面(第6図、図版三・四)

第5層の水田耕作土を除去したところ、第5層下面で調査区南半に水田跡、北半に集落跡を検出した。ともに同一面で検出したが、遺構埋土の特徴や包含する遺物から、前者が平安時代後期、後者が平安時代前期から中期に相当し、若干の時期差が生じる。以下、後述する遺構の名称については、前者の水田跡関連遺構を1400番台、集落跡関連遺構を1500番台で記した。なお、水田面については、耕作溝などは検出することができたが、明確に畦畔と判断できる高まりは確認することができなかった。中世期(1400番台)の生産遺構によって広く削平及び削平されて残存しなかった可能性が高い。

1400番台遺構については、耕作溝群17条(1401~1403・1408~1421 SD)、小穴3個(1404~1406 SK)、井戸1基(1407 SE)を検出した。1500番台遺構については、溝4条(1501~1503・1509 SD)、土坑4基(1505~1508 SK)を検出した。なお検出された耕作溝は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20° それぞれ傾きをもつ。

以下、当該面を「第4面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については図面や表などを参照されたい。

①1400番台遺構

溝(SD)

1401~1403・1408~1421 SD(第12図-10、第7表)

調査区9・10Hと9・10Gと9・10F地区で検出した耕作溝群である。1401~1403 SDは10Y5/1灰色細砂シルトと5GY6/1オリーブ灰色細砂が混ざる単一層の埋土、1408~1416 SDは10Y5/1灰色粗砂混シルトに土師器片含む単一層の埋土、1417 SDは10Y6/1灰色中疊粗砂(径~1.0cm台の礫が少量混じる)と10Y5/1灰色中砂混細砂が混じる単一層の埋土、1418~1421 SDは10Y5/1灰色中砂混細砂シルトに7.5Y6/2灰オリーブ色中~細砂が斑点状に混じる単一層の埋土をそれぞれもつ。全て南北方向に並列する。遺物は、1401~1403 SDから土師器などの碎片、1408~1416 SDから土師器(羽釜など)の碎片、1417~1421 SDから瓦器・黒色土器・土師器の碎片が出土した。このうち1417 SDから出土した10を図化した。10は土師器の小皿で、復元口径8.7cm、残存高1.3cmを測る。「て」の字状口縁をもつ。時期は11世紀中頃に比定できる。

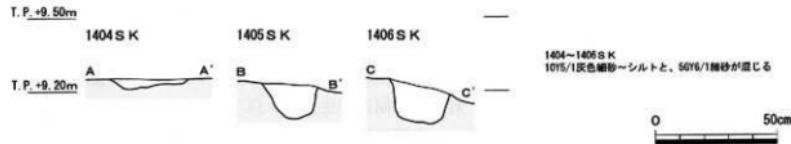


第12図 1406 SK・1407 SE・1417 SD出土遺物実測図(S=1/4)

第7表 1区第4面耕作溝(SD)法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
1401 SD	10H	(8.80)	0.55	5.2
1402 SD	〃	(8.80)	0.6	4.3
1403 SD	〃	4.20	0.3	4.2
1408 SD	9・10H と10G	(8.50)	0.52	8.5
1409 SD	〃	(1.54)	0.38	6.4
1410 SD	10G	(4.75)	0.50	4.2
1411 SD	9・10G	(3.27)	0.40	3.1
1412 SD	10G	(1.92)	0.20	3.0
1413 SD	〃	(1.88)	0.20	1.7
1414 SD	〃	(1.88)	(0.34)	2.6
1415 SD	9 G	(2.82)	0.27	2.1
1416 SD	9・10G	(5.50)	0.40	4.7
1417 SD	10F	(1.84)	0.73	7.8
1418 SD	9・10F	(0.62)	0.30	1.4
1419 SD	〃	1.80	0.28	2.6
1420 SD	〃	(2.74)	0.48	5.1
1421 SD	9 F	1.50	0.22	1.1

* ()内数値は検出長及び検出幅 * 表記の数値は最大値



第13図 1404~1406 SK 断面図(S=1/20)

土坑(SK)

1404~1406 SK (第6・12図-9、第13図)

調査区9・10H地区で検出した土坑である。ともに10Y5/1灰色細砂～シルトと5GY6/1オリーブ灰色細砂が混じる単一層の埋土をもち、南北方向に並列する。柱穴跡などの痕跡は見られず、詳細は不明である。遺物は、1404・1405 SKから出土しなかった。唯一、1406 SKから9の土師器小皿が出土した。9は復元口径8.8cm、残存高0.7cmを測り、「て」の字状口縁をもつ。時期は11世紀中頃に比定できる。

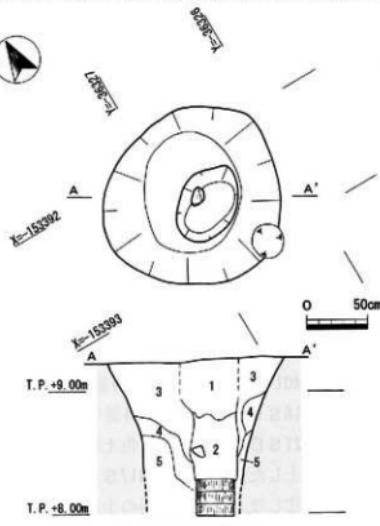
井戸(SE)

1407 S E (第12図-8、第14図)

調査区10H地区で検出した。平面形態は径1.4~1.45mのほぼ円形を呈し、深さ約1.3mを測る。井戸側は底部に径0.5m前後、高さ0.1mの曲げ物を3段積み上げた状態で検出された。なお、井戸側埋土内のT.P.+8.5m地点で0.1m前後の自然石を検出した。特に加工痕などは見られず、用途は不明である。

当該遺構は、ベースが粘土層であり、検出時より湧水が顕著であった為、調査は困難を極めた。掘り方検出当初は井戸側の掘り方を確認することはできず、検出面がヘドロ状になった為、掘り方内部を約0.3m掘り下げ精査を行った。その結果、径0.68m前後の井戸側掘り方が検出された。さらに埋土の掘削を進めたが、湧水が著しく、下層部の基盤層が河川堆積であった為、崩壊の危険があり、人力による調査は遺構検出面より1.3m(T.P.+8.3m)地点で断念せざるを得なかった。なお調査終了後に、機械掘削によって、当該井戸底部の確認を試みたが、曲げ物を3段有することを確認するに留まった。

遺物は、須恵器・土師器などの碎片が出土し、唯一図化できたのは8の黒色土器碗であった。8は復元口径15.8cm、残存高4.7cmを測る。



第14図 1407 S E 平面図・断面図(S=1/40)

調整は、内外面に緻密なヘラミガキ調整が見られる。内外面全面を黒色に仕上げる。時期は10世紀後半～11世紀前半に比定できる。

畦畔(畦畔)

1423畦畔(写真8)

調査区10G地区で検出した。検出地点が1214島畠造成地点と重複することから、当該畦畔箇所に島畠を再度造成したものと推察できる。調査当時は当該遺構を認識できなかったが、整理作業時に、調査区南壁断面図や平面遺構検出状況図から、畦畔であると考えられた。検出規模は北半一帯の擾乱により、大部分が削平されている為、検出長は2.0m、幅1.9mを測る。当該遺構東側に隣接する1417SDは当該遺構に機能時に伴う排水路であった可能性も考えられる。



1423-②: 1014/1櫛状灰黑色粗砂層部分シルト(土器器片含む)

②1500番台遺構

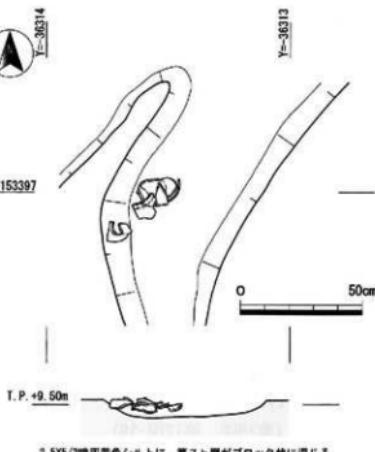
溝(SD)

1501～1503SD(第16図)

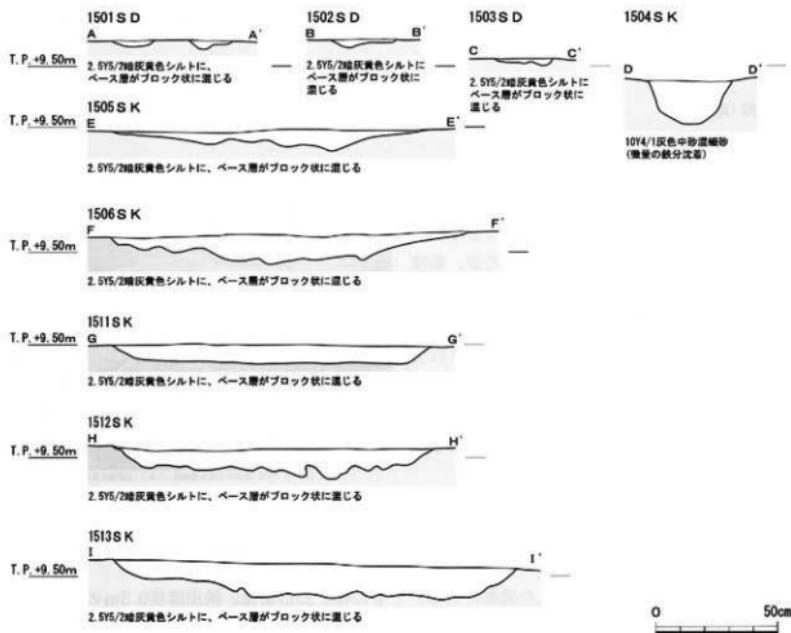
調査区1・10J地区で検出した溝群である。ともに幅0.25m前後、検出深度0.3mの比較的規模が小さな溝で、単一層の埋土をもつ。方向に規則性がなく、役割は不明である。遺物は、1501SDから土師器(小皿など)の碎片、1503SDから土師器の碎片がそれぞれ出土した。

1509SD(第15図、第17図-12・13・17)

調査区10Iと1J地区で検出した溝である。幅0.55m前後、検出深度0.7mで単一層の埋土をもつ。東を基点に、西方向と南西方向へ分岐する溝である。遺構検出面がT.P.+9.52mに対し、ほぼ完形の遺物がT.P.+9.53mを最頂点として出土したことから、本来の遺構面は若干上部に存在したものと推測できる。おそらく本米の遺構面が後世の土地利用による擾拌及び削平された為、上部で確認できなかったものと推測できる。また、検出溝の幅が0.55mに対して検出深度が0.7m以下であることから、今回検出した箇所は遺構最下部であった可能性が高く、先端部分で収束して検出された溝が、本来は調査区外まで伸びていた可能性が極めて高い。



第15図 1509SD土器出土状況平面図・立面図 (S=1/20)



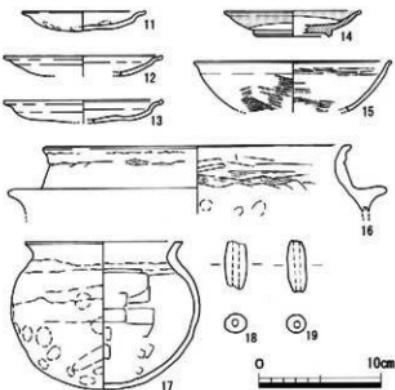
第16図 1501～1503 S D、1504～1506・1511～1513 S K断面図(S=1/20)

と考えられる。遺物は、土師器小皿(12・13)、土師器の甕(17)が出土した。12・13は共に「て」の字状口縁をもち、復元口径12.8cm、残存器高1.8cmを測る。12は9世紀後半、13は口縁部の屈曲が顕著に見られることから、10世紀後半に比定できる。17は口径12.2cm、高さ12.2cmを測る。口縁部形態は、緩やかに外反した後短く立ち上がり、端部に面をもつ。体部形態は球形を呈し、上半部に最大径をもつ。調整は内面に横方向の板ナデが顕著に見られ、粘土紐接合のち押さえの痕跡が確認できる。時期は9世紀後半～10世紀初頭に比定できる。以上より、当該溝の廃絶期は10世紀後半に比定できる。

土坑(S K)

1504 S K(第16図、第17図-19)

調査区1 I 地区で検出した。平面形態は瓢箪型を呈し、長径0.9m、短径0.4m前後を測る。



第17図 1504・1508 S K、1509 S D出土遺物実測図(S=1/4)

遺物は土師器の碎片と土錐(19)が出土した。19は管状土錐で、長さ4.2cm、径1.5cm、孔0.5cm、重さ9.85gを測る。

1505~1507SK(第16図)

調査区10Jと1・10I地区で検出した。検出時は土坑として1505~1507SKを単独の遺構として調査したが、埋土の特徴や遺構深度が全て0.1m前後と類似することから、同一の遺構であった可能性が極めて高いと考えられる。

遺物は、1505SKから土師器(小皿など)、1506SKから土師器(羽釜など)の碎片が出土した。

1508SK(第17図-11・14~16・18、第18図)

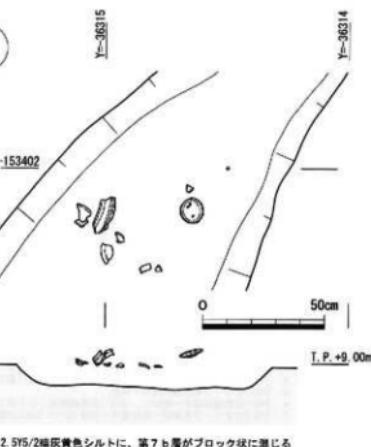
調査区1I地区で検出した。北東-南西方に向に広がる楕円形を呈し、長径2.8m、短径1.9m前後を測る。遺構検出面がT.P.+9.49m前後に対して、ほぼ完形の遺物がT.P.+9.56mを最頂点として検出したことから、本来の遺構面はやや上部に存在したものと推測できる。おそらく、本来の遺構面が後世の土地利用による攪拌及び削平された為、上部で確認できなかったものと推測できる。

遺物は土師器小皿(11)、灰釉陶器の皿(14)、黒色土器(15)、羽釜(16)、土錐(18)が出土した。11は口径10.0cm、高さ1.6cmの完形の小皿で、「て」の字状口縁をもつ。時期は10世紀中頃に比定できる。14は復元口径10.9cm、器高2.1cmを測る。全体の三分の一が残存する。灰釉は内外面上半部に施される。時期は

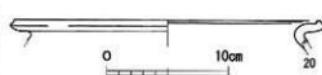
10世紀前半〔O53窯式(山下峰司1995)〕に比定できる。15は復元口径16.0cm、残存器高4.1cmを測る。調整は、内外面に緻密なハラミガキ調整が見られ、さらに内面には暗文が見られる。内黒仕上げである。9世紀後半に比定できる。16は復元口径24.9cm、残存器高5.5cmを測る。生駒山西麓産。時期は9世紀後半~10世紀前半に比定できる。18は管状土錐で、長さ3.6cm、径1.8cm、孔0.6cm、重さ10.45gを測る。以上より、当該土坑の廃絶期は10世紀前半に比定できる。

・第7b層出土遺物(第19図-20)

当該層中にはほとんど遺物が含まれていなかった。図化した20は、第4面精査時に当該層中から出土した遺物である。20は口縁端部が上方に肥厚し、端部に面をもつ土師器の壺である。時期は8世紀後半に比定できる。



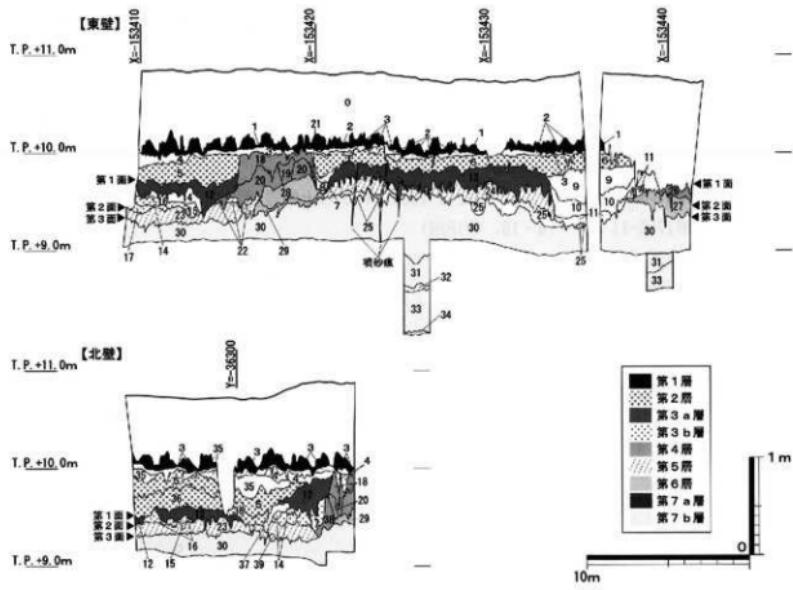
2.5m/2堆灰黄色シルトに、第7b層がブロック状に落ちる



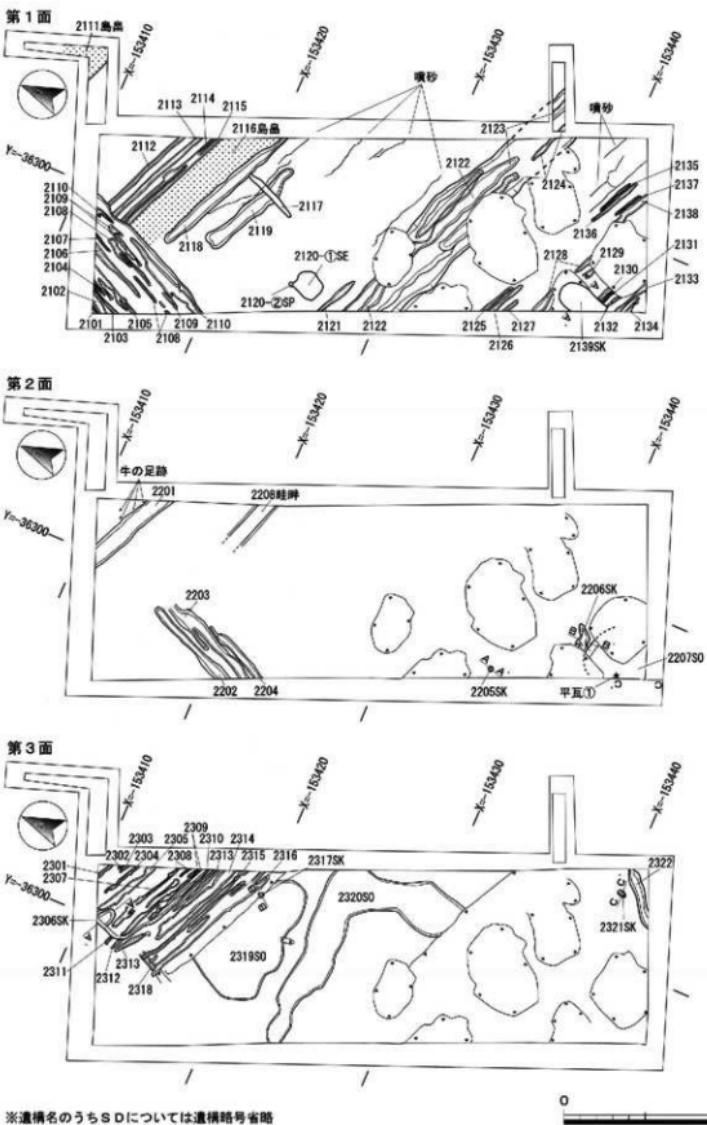
第19図 第7b層出土遺物実測図(S=1/4)

(2) 2区(第20・21図)

2J~5B・1A地区に位置し、東西13.2m×南北36.8m前後を測る長方形に、北東端壁面か



第20図 2区東・北壁断面図(S=垂直:1/50、水平:1/300)



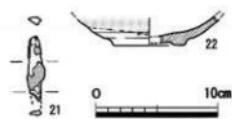
第21図 2区第1～3面平面図 (S=1/300)

ら逆L字状にのびる東西5.0m×南北7.0m、幅1.8m前後を測る突出部、南よりの東壁面から長方形にのびる東西4.8m×南北1.6mを測る突出部を持つ調査区を設定した。当調査区の面積は約513.04m²を測る。調査当初の予定では、南よりの西壁面に2m四方の突出部が含まれていたが、既往建物の基礎杭部分にあたる為、市教委と協議の上、調査は行わなかった。

調査は、現地表面(T.P.+10.72~10.98m)から約1.1mまで機械掘削し、人力掘削を約0.4m地点まで行った。なお、調査終了後、調査区南端部と中央部の2箇所で機械掘削により深さ1.1m(T.P.+8.1m)までの下層部を確認した。

・第2層出土遺物(第22図-21・22)

当該層中に包含する遺物の大半は瓦器・土師器などの碎片であった。図化した21・22は、第1面遺構検出時に出土した遺物である。21は鉄製の釘で、残存長5.2cm、重さ7.2gを測る。22は唐津系陶器碗で、残存器高2.5cmを測る。体部外面には灰釉が見られる。時期は17世紀中~後半に比定できる。



第22図 第2層出土遺物実測図
(S=1/4)

・第1面(第21図、写真9、図版五)

第0層の盛土と第1層の旧耕作土、第2層の近世以降の耕作土を除去したところ、第2層下面で近世以降の耕作溝群35条(2101~2110、2112~2115、2117~2119、2121~2138 S D)、島畠(2111・2116島畠)、井戸1基(2120-①S E)、小穴1個(2120-②S P)、土坑1基(2139 S K)を検出した。現地表面下約1.2m(T.P.+9.7~9.8m)地点に広がる。なお当該面で検出された耕作溝は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20°それぞれ傾きをもつ。



写真9 噴砂検出状況(北西から)

調査区南半部では、後世の土地利用によって広く破壊されており、部分的な遺構検出に留まった。調査区北半では、幾度にも切り合い関係の生じる耕作痕跡が検出された。また、中央から南半部でも耕作痕跡が一部確認できた。耕作痕の希薄な箇所はおそらく島畠に利用されていたものと推測できるが、顕著な痕跡は確認できなかった。当該面で検出された遺構は、埋土の特徴や遺構の切り合い関係によって、少なくとも2時期以上に分類できる。

なお、調査区中央部から南部では、地震の痕跡である噴砂を確認した。東西方向より南に20°傾きをもち、顕著なもので長さ6.0m、幅0.5mを測る。第20図-13層上面及び層中から延びることから、この時期に起きた地震の痕跡と考えられる。

以下、当該面を「第1面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

溝(S D)

2101~2110 S D (第23図-27、第8表)

調査区2 J 地区で検出した耕作溝群である。ともに7.5Y5/1灰色粗砂混中～細砂に5Y7/2灰白色中～細砂が波状に混じる。なお径0.8cmの小石を少量含み、植物根痕が少量見られる単一層の埋土をもち、全て南北方向に並列する。

遺物は、各溝から瓦器・土師器(小皿など)・瓦質土器(擂鉢など)の碎片が出土した。このうち2110 S D から出土した27を図化した。27は瓦質土器の風炉で、口縁部のみ残存する。復元口径26.6cm、残存器高3.6cmを測る。口縁部形態は、短く直立しており、口縁端部に面をもつ。外面調整は、幅2cm前後のヘラ状工具による刻み目を縦方向に施し、内面に鉄分の付着が見られる。時期は15世紀前半に比定できる。

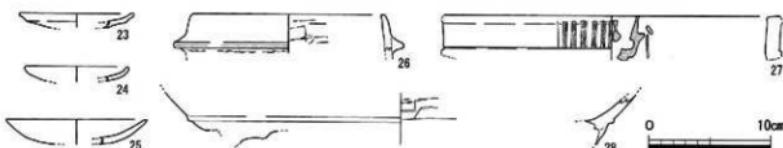
2112~2115 S D (第23図-28、第8表)

調査区2 J・A 地区で検出した耕作溝群である。ともに2.5Y5/2暗灰黄色中～細礫混中～細砂に2.5Y7/6明黄褐色中礫混中砂が混じる単一層の埋土をもち、全て東西方向に並列する。なお遺構の切り合い関係より、当該溝群埋没後に前述の2101~2110 S D が構築されていることが確認できた。

遺物は、各溝から瓦器・須恵器・土師器の碎片が出土した。このうち2115 S D から出土した28を図化した。28は瓦質土器の奈良火鉢で、底部の一部分が残存する。体部と脚部の境目に削り出し突帶を巡らす。時期は13世紀後半～14世紀初頭に比定できる。

第8表 2区第1面耕作溝(S D) 法量法

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
2101 S D	2 J	(0.65)	0.14	1.2	2122 S D	4 A・B	(5.85)	0.60	7.7
2102 S D	~	(1.60)	0.40	5.5	2123 S D	3 J・A、4 A・B	(17.80)	0.80	8.9
2103 S D	~	(0.20)	0.22	6.0	2124 S D	4 A・B	(10.80)	0.70	14.5
2104 S D	~	(1.00)	0.14	3.3	2125 S D	4 A	(2.21)	0.30	5.8
2105 S D	~	(3.97)	0.20	5.1	2126 S D	~	(2.55)	~	4.4
2106 S D	~	(4.35)	0.44	5.9	2127 S D	~	(1.20)	0.20	4.5
2107 S D	~	(6.72)	0.18	3.0	2128 S D	4・5 A	(5.10)	~	3.3
2108 S D	~	(3.82)	0.42	2.5	2129 S D	5 A	(0.72)	0.30	5.7
2109 S D	~	(6.58)	0.36	4.2	2130 S D	~	(1.03)	0.20	2.9
2110 S D	~	(9.00)	0.98	5.9	2131 S D	~	(~)	0.10	2.1
2112 S D	2 J・A	(7.32)	0.30	9.4	2132 S D	~	(1.10)	0.20	3.2
2113 S D	~	(8.83)	~	4.0	2133 S D	~	(2.87)	0.60	3.4
2114 S D	~	(9.82)	0.20	9.2	2134 S D	~	(1.20)	0.40	3.5
2115 S D	~	(10.50)	0.30	5.0	2135 S D	4・5 A	2.51	0.20	1.8
2117 S D	2・3 A	3.58	0.35	4.1	2136 S D	~	3.60	0.30	3.6
2118 S D	2 J・A、3 A	(9.70)	0.80	9.7	2137 S D	5 B	1.95	0.20	2.5
2119 S D	~	(6.80)	1.12	8.2	2138 S D	~	(2.75)	0.50	6.8
2121 S D	3 J・A	(2.90)	0.40	~	*()内数値は検出長及び検出幅				*表記の数値は最大値



第23図 2110・2115・2118・2122~2124・2135 S D 出土遺物実測図(S=1/4)

2117～2119 S D (第23図-23・26、第8表)

調査区2・3 Jと2・3 A地区で検出した耕作溝群である。なお遺構埋土の特徴や切り合い関係より2118・2119 S D埋没後に2117 S Dが構築されていることが確認できた。2117 S Dは7.5Y6/2灰オリーブ色粗砂混中～細砂、2118・2119 S Dは7.5Y6/2灰オリーブ色粗～中砂混細砂に、10Y5/1灰色中砂混細砂～シルトが混じる。なお径0.8cm大の礫が少量混じる単一層の埋土をもつ。2117 S Dは南北方向に伸び、これに直交するように2118・2119 S Dが並列する。当該溝群は前述の耕作溝群より幅広であり畦畔脇の側溝の可能性も示唆できる。

遺物は、2118 S Dから瓦器・瓦質土器(羽釜など)・土師器(小皿など)、2119 S Dから土師器の碎片が出土した。このうち2118 S Dから出土した23と26を図化した。23は土師器の小皿で、口縁部から底部まで残存する。復元口径8.9cm、器高1.3cmを測る。時期は13世紀中頃に比定できる。26は瓦質土器の小形の羽釜で、口縁部が残存する。復元口径15.4cm、残存器高3.1cmを測る。時期は12世紀後半～13世紀前半に比定できる。

2122～2124 S D (第23図-25、第8表)

調査区3・4 Jと3・4 Aと4・4 B地区で検出した耕作溝群である。ともに5Y5/1灰色粗砂混細砂～シルトと5Y6/1灰色粗～中砂が混じる。なお多量の鉄分が沈着する単一層の埋土をもち、全て東西方向に並列する。

遺物は、各溝から国産陶磁器・瓦質土器・瓦器・瓦・土師器(小皿・瓶など)・須恵器の碎片が出土した。このうち25を図化した。25は土師器の小皿で、口縁部から底部まで残存する。復元口径12.2cm、器高1.3cmを測る。時期は13世紀中頃に比定できる。

2125～2138 S D (第23図-24、第8表)

調査区4・5 Aと4・5 B地区で検出した耕作溝群である。ともに10Y5/1灰色粗砂混細砂に径0.3cm大の礫が少量混じる。少量の鉄分が沈着する単一層の埋土をもつ。全て東西方向に並列する。

遺物は、各溝から瓦器・須恵器・土師器(小皿・羽釜など)の碎片が出土した。このうち2135 S Dから出土した24を図化した。24は土師器の小皿で、口縁部が残存する。復元口径8.3cm、残存器高1.2cmを測る。口縁部は丸みを帯びており、内外面全体にナデ調整が見られる。時期は13世紀後半に比定できる。

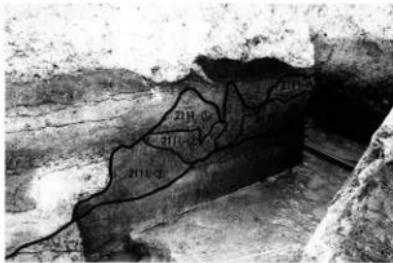
島畠(島畠)

2111島畠(写真10)

調査区1 A地区で検出した。検出地点が面積の狭い突出部分であり、水ハケの悪い箇所であった為、平面調査時には当該遺構を認識できなかった。その後、調査地点の北壁及び南壁断面精査時に、東西方向に傾きをもつ島畠であると推察できた。推定できる法量は、長さ2.0m以上、幅0.9m以上、残存高0.5m前後を測る。残存する造成土2111-①～③を観察した結果、氾濫堆積物の堆積はなく、耕作による人為的な攪拌の痕跡や、植物根の痕跡が顕著に見られることから、水田耕作土であると考えられる。遺物は、2111-③から土師器の碎片が出土した。

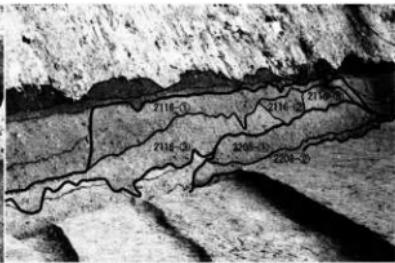
2116島畠(写真11)

調査区2 Jと2・3 A地区で検出した。東西方向に傾きをもつ島畠であると推察できた。機械掘削時に2116-①及び2116-②の大半を除去してしまったので、平面調査では当該遺構を認識でき



2111-① 2.5m/2段の堆積物を構成する中砂～細砂の層が複数個存在する。
 (幅=1.5mの砂の層が最も厚い) 2111-② 1段の土中に少しある一箇所が表面に露出する
 廃棄物底面に埋方側に触れる。2.5m/2段の堆積物を構成する
 廃棄物底面に埋方側に入れる
 2111-③ 2.5m/2段の堆積物を構成する中砂～細砂の層が複数個存在する。
 (幅=1.5mの砂の層が最も厚い) 2111-④ 2.5m/2段の堆積物を構成する中砂～細砂の層が複数個存在する。

写真10 2111島畠北壁断面(南から)



2116-① 2.5m/2段の堆積物を構成する中砂～細砂が複数個存在する。
 (幅=1.5mの砂の層が最も厚い)
 2116-② 2116-①ベースに入れる。2116-①がブロック状に入る。
 (壁の内部含む)
 2116-③ 2.5m/2段の堆積物を構成する中砂～細砂が複数個存在する。
 (壁の内部含む)
 2208-① 2.5m/2段の堆積物を構成する中砂～細砂の層が複数個存在する。
 (壁の内部含む)
 2208-② 2.5m/2段の堆積物を構成する中砂～細砂の層が複数個存在する。

写真11 2116島畠・2208畦断面(西から)

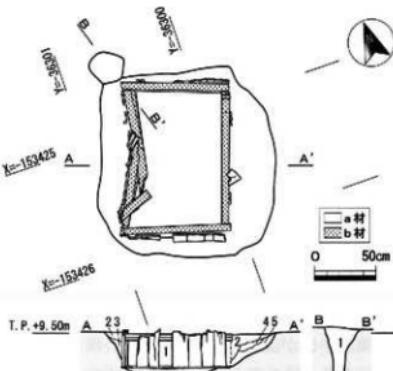
なかつた。調査地点の東壁断面状況より、推定できる法量は、長さ10.0m以上、幅2.0m前後、残存高0.5m前後を測る。残存する造成土2116-①～③を観察した結果、氾濫堆積物の堆積ではなく、人為的な攪拌の痕跡が顕著に見られることから、水田耕作土であると考えられる。2116-②は埋土の特徴から、2116-③造成時に構築された遺構である可能性が高い。遺物は確認できなかった。

井戸(S E)・小穴(S P)

2120-① S E・2120-② S P(第24図)

調査区3 J・A地区で検出した。2120-① S Eの掘方の平面形態は径1.5m前後の隅丸方形を呈し、深さ約0.37mを測る。井戸側に方形木枠をもつ。木枠の形態は、長辺1.25m、短辺0.9mを測る周囲に板材(a材)を並べ、その内側にコの字状に組まれた板材(b材)を組み合わせたものである。井戸枠の構築方法は、組立て式(鐘方正樹2003)で、あらかじめ「コ」の字状の作製しておいた部材(b材)とa材をもち込んで井戸側を組立てる方法である。埋土を観察したところ、井戸側埋土にブロック土が目立ち、人為的に埋没したものと推測できる。今回の調査で検出された方形木枠は一段であったが、当初は上部にも続いており、廃絶時に転用などによって抜き取られた可能性が考えられる。

また当該井戸の北隣には、径0.3m弱、深さ0.4mを測る円形の杭跡(2120-②S P)が存在する。検出地点が近接することや、埋土が2120-①S Eの埋土1と類似することから、井戸に関連するものと推測できる。



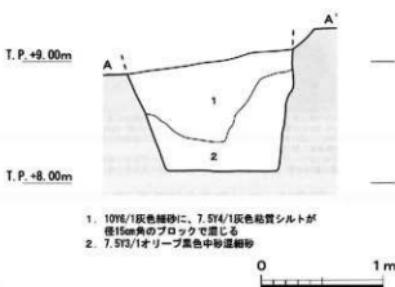
1. 5.5m/1段の細砂～中砂ブロックと、5.6/1灰白色細砂～粗砂が混じる
 2. 10.7/4灰白色細砂中～細砂に、5.6/2灰オリーブ色底～中砂が混じる
 (炭化木を含む)
 3. 10.7/4灰白色細砂に、7.55/2灰オリーブ色中～細砂がブロック状に混じる
 4. 10.7/6灰白色中～細砂(第7b層)に、10.7/1灰白色中砂が混じる

当該井戸及び杭跡から遺物は出土しなかったが、井戸の形態と埋土の特徴より、構築時期は中世以降に比定でき、旧市営住宅建築直前まで使用されていたものと考えられる。

土坑(S K)

2139 S K (第21・25図)

調査区4・5 A地区で検出した。当該土坑上部は既往建物の解体に伴う掘削で破壊されている。平面形態は長辺2.85m、短辺1.7mの楕円形を呈し、深さ1.0m以上を測る。2層に分層でき、このうち埋土1には各層の土がブロック角状に入り、人為的に埋没したものと推測できる。また、埋土2の底部が湧水層に達することから、かつては井戸であり、井戸側も存在したもの、転用などによって抜き取られた可能性が考えられる。遺物は、須恵器の碎片が出土したのみであった。



第25図 2139 S K断面図 (S=1/40)

・第2面(第21図、図版五)

第3a層の近世以降の耕作土と、第3b層の氾濫堆積土を全て除去したところ、第4・5層上面で、近世の溝(2201~2204 S D)、土坑(2205・2206 S K)、落ち込み1箇所(2207 S O)、畦畔(2208畦畔)を検出した。現地表面下約1.0~1.4m(T.P.+9.8~9.4m)地点に広がる。なお当該面で検出された溝・畦畔は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20° それぞれ傾きをもつ。

以下、当該面を「第2面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

溝(S D)

2201 S D (第9表、写真12)

調査区2 J・A地区で検出した耕作溝である。2.5Y5/2暗灰黄色中～細砂に2.5Y7/6明黄褐色中砂混中砂が混じる。径0.5cm大の礫が多量に混じる單一層の埋土をもち、東西方向に並列する。溝からは遺物は出土しなかった。当該溝の北側では牛の足跡が検出されており、牛耕が盛んに行われていたものと推察できる。

2202~2204 S D (第9表)

調査区2・3 J地区で検出した耕作溝群である。ともに10Y4/1灰色中砂混細砂～シルトと

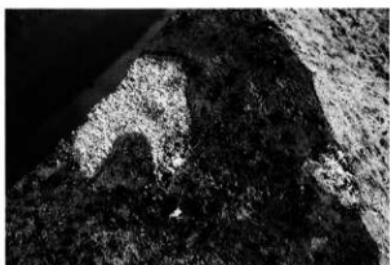


写真12 牛の足跡検出状況(北西から)

7.5G Y5/1緑灰色中砂混シルトが混じる。2.5Y7/3浅黄色粗~細砂がブロック状に混じる単一層の埋土をもち、全て南北方向に並列する。遺物は、各溝から瓦器・土師器・瓦質土器・須恵器・瓦の碎片が出土した。時期は中世以降に比定できる。

第9表 2区第2面耕作溝(S D)法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
2201 S D	2 J · A	(5.72)	1.20	10.0	2203 S D	2 · 3 J	(6.42)	1.16	10.2
2202 S D	2 · 3 J	(6.28)	0.84	17.3	2204 S D	※	(4.45)	0.60	8.7

*()内数値は検出長及び検出幅 *表記の数値は最大値

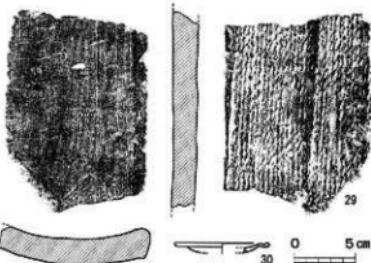
土坑(S K)

2205 S K (第27図)

調査区4 A地区で検出した土坑である。上面遺構の2125 S Dに南半分は削平されている。平面形態は径0.28m前後の円形を呈し、深さ0.05m前後を測る。埋土は単一層で、遺物は出土しなかつた。

2206 S K (第26図-30、第27図)

調査区5 A地区で検出した土坑である。上面遺構の2128・2129 S Dによって上部が削平されている。平面形態は長辺1.8m前後、短辺0.6m前後の不定形を呈し、深さ0.05m前後を測る。埋土は単一層である。遺物は、黒色土器・土師器(小皿など)・須恵器の碎片が出土した。このうち30を図化した。30は土師器の小皿で、復元口径7.6cm、器高0.8cmを測る。「て」の字状口縁をもち、時期は11世紀中頃に比定できる。

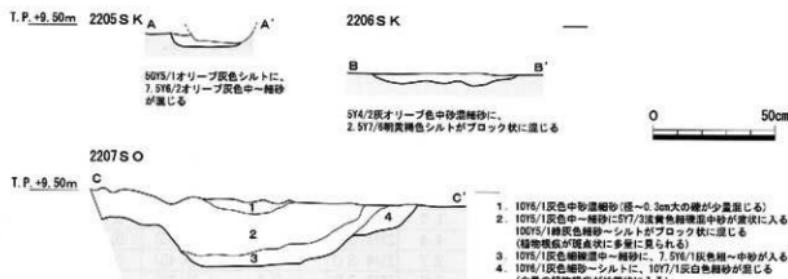


第26図 2206 S K、2207 S O出土遺物実測図(S=1/4)

落ち込み(S O)

2207 S O (第26図-29、第27図)

調査区5 A地区で検出した落ち込み状遺構である。当該遺構は、搅乱に一部破壊されており、



第27図 2205・2206 S K、2207 S O断面図(S=1/20)

調査区の南西隅部から調査区外に延びるが、調査区西壁及び南壁断面状況より、深さ2.58mを測るものと推察できる。埋土を観察したところ、埋土2では耕作工具による痕跡及び、植物遺体が顕著に見られ、埋土4においても植物遺体が確認されていることから、水田などの耕作に関連する遺構であったことが推察できる。

遺物は平瓦(29)が出土した。29は平瓦の破片で、焼成は良好である。成形及び調整を見ると、凹面に布目痕、凸面に繩目痕を残す。時期は中世期に比定できる。

畦畔(畦畔)

2208畦畔(写真11)

調査区2A地区で検出した。東西方向に傾きをもつ畦畔である。当該畦畔は2116島畠造成土を全て除去したところ検出できた遺構であり、2116島畠は当該畦畔の高まりを利用して、造成したものと推察できる。造成土を観察した結果、2208-①・②の2層で構築され、土師器の碎片を包含する。

・第3面(第21図、図版六)

第5層の水田耕作土を全て除去したところ、第5層下面で、耕作溝17条(2301~2305・2307~2316・2318・2322 S D)、土坑3基(2306・2317・2321 S K)、落ち込み2箇所(2319・2320 S O)を検出した。現地表面下約1.2~1.4m(T.P.+9.3~9.8m)地点に広がる。当該遺構面は近世及び中世以降の土地利用が盛んな為削平や攪拌を受けており、遺構の検出は希薄であった。北東隅を中心として検出した耕作溝群(2301~2305・2307~2316 S D)は、地形の低い箇所であった為、遺構が残存していたものと考えられる。なお当該面で検出された耕作溝は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20° それぞれ傾きをもつ。

以下、当該面を「第3面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

溝(S D)

2301~2305・2307~2310 S D(第28図-31・33、第10表)

調査区2A地区で検出した耕作溝群である。ともに10Y5/1灰色中~細砂混シルトに、5Y7/2灰白色中~細砂が波状に入る。多量の植物根痕が見られる単一層の埋土をもち、全て東西方向に並列する。

第10表 2区第3面耕作溝(S D)法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
2301 S D	2 A	(1.15)	0.20	2.2	2311 S D	2 J	(0.70)	0.20	1.8
2302 S D	〃	(0.35)	0.10	1.8	2312 S D	〃	(1.00)	0.22	2.7
2303 S D	〃	(0.70)	0.22	〃	2313 S D	2 J・A	(8.15)	0.33	5.4
2304 S D	〃	(2.72)	0.25	1.7	2314 S D	2 A	(6.55)	0.62	4.5
2305 S D	〃	(5.05)	0.50	4.4	2315 S D	2 J・A	(8.55)	0.28	5.7
2307 S D	〃	(4.55)	0.45	2.7	2316 S D	〃	(9.45)	0.83	6.8
2308 S D	〃	(4.65)	0.25	2.8	2318 S D	2 J	(1.30)	0.34	12.0
2309 S D	2 J・A	(6.30)	0.33	6.0	2322 S D	4・5 B	(3.65)	0.63	7.5
2310 S D	2 A	(4.80)	0.24	3.8	*	()内数値は検出長及び検出幅	*	表記の数値は最大値	

遺物は、2305・2308・2309 S Dから土師器(小皿など)の碎片、2307 S Dから瓦質土器・須恵器・土師器の碎片が出土した。このうち2308 S Dから出土した31、2309 S Dから出土した33を図化した。31は土師器の小皿で口縁部が残存する。復元口径9.0cm、残存器高1.7cmを測る。時期は10世紀後半～11世紀前半に比定できる。33は土師器碗の口縁部で、復元口径15.4cm、残存器高3.2cmを測る。時期は11世紀前半に比定できる。

2311～2316 S D (第28図-32、第10表)

調査区2 J・A地区で検出した耕作溝群である。ともに2.5Y5/2暗灰黄色中砂混シルトに、2.5Y6/3にびい黄色細砂が斑点状に混じる。多量の鉄分沈着する單一層の埋土をもち、全て東西方向に並列する。

遺物は、2313 S Dから瓦質土器・土師器、2314～2316 S Dから土師器(羽釜など)の碎片が出土した。このうち2315 S Dから出土した32を図化した。32は土師器の小型羽釜で、復元口径6.4cm、残存器高5.6cmを測る。時期は11世紀前半に比定できる。

2318 S D (第10表)

調査区2 J地区で検出した耕作溝である。2.5Y5/2暗灰黄色粗砂混細砂～シルトに、10YR3/3暗褐色中砂混細砂～シルトが斑点状に混じる。さらに2.5Y7/2灰黄色粗砂混細砂が混じる單一層の埋土をもち、南北方向に並列する。遺物は、土師器・弥生土器の碎片が出土した。当該遺構は、第7 b層上面遺構に帰属する遺構であると推察できる。

2322 S D (第10表)

調査区4・5 B地区で検出した耕作溝である。10YR4/4褐色中砂混細砂～シルトに微量の植物遺体と炭片を含む單一層の埋土をもち、東西方向に並列する。遺物は出土しなかった。

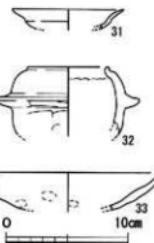
土坑(S K)

2306 S K (第21・29図)

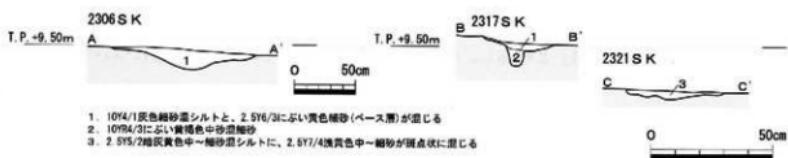
調査区2 J・A地区で検出した土坑である。平面形態は橢円形を呈し、長辺1.1m、短辺0.9m、深さ18.8cmを測る。遺物は出土しなかった。

2317 S K (第21・29図)

調査区2 A地区で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し、径0.3m、深さ0.45mを測る。遺物は出土しなかった。



第28図 2301～2310・2315
S D出土遺物実測図 (S =
1/4)



第29図 2306・2317・2321 S K断面図

2321 S K (第21・29図)

調査区4・5B地区で検出した土坑である。平面形態はほぼ円形を呈し、径0.39m、深さ0.4mを測る。遺物は出土しなかった。

落ち込み(S O)

2319 S O

調査区2J・Aと3J・A地区で検出した落ち込み状遺構である。当該遺構は、後世の土地利用によって広く削平されている為、明確な遺構としては検出できなかった。深さ0.16mを測り、7.5GY4/1暗緑灰色中砂混細砂に5Y6/2灰オリーブ色中砂混細砂が混じる単一層の埋土をもつ。ベース層との攪拌が顕著に見られるため、おそらく水田などの耕作に関連する遺構である可能性が高い。遺物は出土しなかった。

2320 S O

調査区2J・Aと3J・A地区で検出した落ち込み状遺構である。当該遺構も2319 S Oと同じく広く削平されている為、明確な遺構としては検出できなかった。深さ0.5mを測り、10Y4/1灰色中砂混細砂・シルトに5Y7/3浅黄色中砂が混じる単一層の埋土をもつ。ベース層との攪拌が顕著に見られるため、2319 S Oと同様に、水田などの耕作に関連する遺構である可能性が高い。遺物は土師器の碎片が出土した。

(3) 3区(第30・31図)

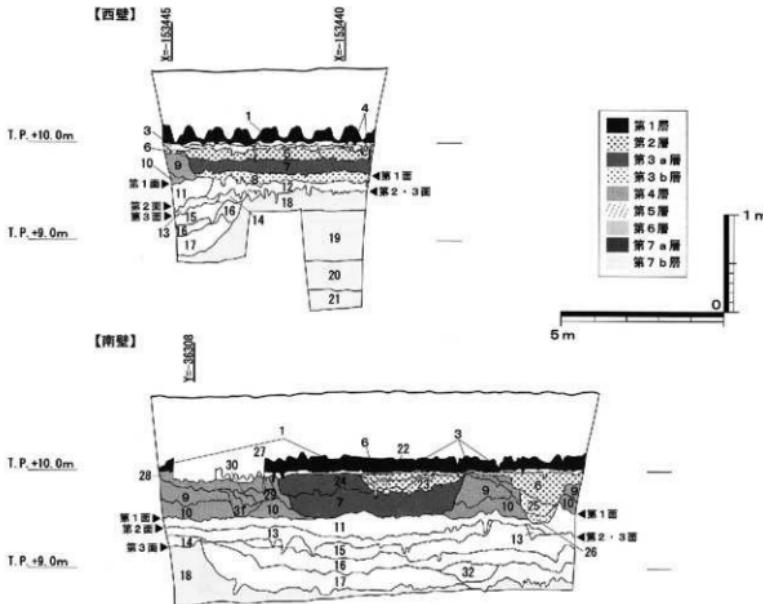
5I・Jと6I・J地区に、東西13.8m×南北7.5m前後を測る長方形を呈する調査区を設定した。当調査区の面積は約103.5m²を測る。

調査は、現地表面(T.P.+10.8m前後)から約0.9mまで機械掘削し、人力掘削を約0.3~1.0m地点まで行った。なお、調査終了後、調査区北西端部の1箇所で機械掘削により深さ1.0m(T.P.+8.3m)までの下層部を確認した。

・第1面(第31図、図版七)

第0層の盛土と第1層の旧耕作土、第2層と第3a層の耕作土を除去したところ、第3b層の堆積を確認した。これをさらに掘削したところ、第3b層下面で島畠(3001~3003島畠)を検出した。当該遺構は平面調査では確認できなかったが、西壁及び南壁断面の状況より、ともに調査区南端から3.0mの地点より南西方向に広がっていくものと推察できた。さらに第4層の島畠造成土層を全て除去したところ、落ち込み2箇所(3101・3102 S O)、近世の耕作溝14条(3103~3116 S D)を検出した。現地表面下約1.15m(T.P.+9.35m)地点に広がる。なお当該面で検出された島畠・耕作溝は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20° それぞれ傾きをもつ。

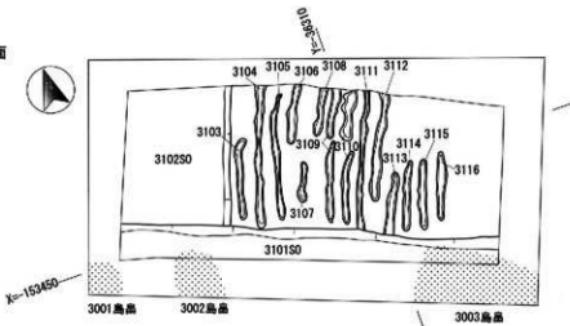
以下、当該面を「第1面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表など参照されたい。



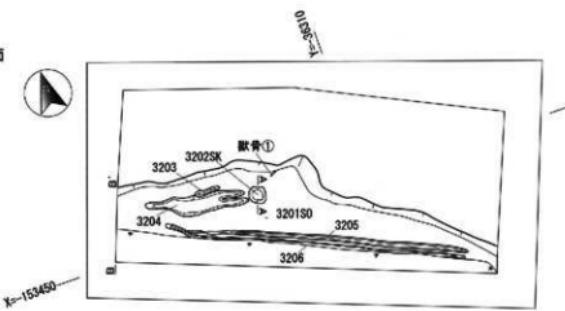
- 1 SY3/1オリーブ黒色細泥層細砂 (径～0.5mmの礫が多量に混じる)
 2 SY4/1灰色細砂～中砂～粗砂 (径～0.1mmの礫が少量混じる)
 3 SY5/1灰色細砂中砂中に、SY6/1灰色細砂～粗砂が混じる (径～0.5mmの礫が多量に混じる)
 4 7 SY5/1灰色細砂中砂シルトと、SY7/1灰色細砂が波状に入れる
 5 SY7/1灰色細砂シルトと、SY8/1白色細砂シルトが混じる (径～0.5mmの礫が少量混じる)
 6 2 SY8/2灰青色細砂～砂泥砂中に、SY9/1灰色細砂シルトがブロック状に混じる (径～1.5mmの礫が少量混じる)
 7 1 SY9/1灰色細砂中に、中砂 (径～0.5mmの礫が多量に混じる)、(0SY14/1暗緑色細砂細砂～粗砂に、(0SY14/1暗緑色細砂細砂～粗砂がブロック状に混じる)
 8 SY5/2灰青色細砂～中砂に、直角面をき上せる (径～0.5mmの礫が多量に混じる) (波片が垂直に混じる)
 9 10Y4/1灰色細砂層連続に、1 SY5/1灰色細砂の中砂～粗砂が混じる (径～0.5mmの礫が少量混じる)
 10 2 SY6/1灰青色細砂層中砂に、2 SY7/6灰青色細砂がブロック状に混じる
 11 10Y4/1灰色細砂層中砂に、2 SY7/6灰青色細砂がブロック状に混じる (径～3.0mmの礫が少量混じる)
 12 100Y4/1鉛錆色～中砂粗砂層に、SY5/2灰青色細砂層中砂が混じる (径～0.5mmの礫が少量混じる)
 13 10Y4/1灰青色細砂～中砂粗砂層に、植物根巣付SY7/2オリーブ黒色細砂層中砂が混じる
 14 100Y5/1暗緑色細砂に、ペースト状をき上せる
 15 2 SY6/1灰青色細砂～中砂に、直角面をき上せる
 16 2 SY6/1灰青色細砂～中砂に、2 SY6/3灰青色細砂が混じる
 17 2 SY8/1灰青色細砂層中砂に、2 SY8/3灰青色細砂が混じる
 18 10Y4/1灰色細砂層連続と、10Y3/1オリーブ黒色細砂層シルトが混じる
 19 10Y4/1鉛錆色細砂層中砂に、SY7/2オリーブ黒色細砂層シルトが混じる
 20 5SY5/1オリーブ灰色細砂シルトに、SY7/0灰青色細砂～粗砂シルトが植物根巣状に入る
 21 2 SY6/1オリーブ灰青色～中砂に、2 SY6/5/1オリーブ灰青色～中砂～粗砂～物質シルトがブロック状に混じる
 22 2 SY6/1灰青色細砂層中砂～中砂 (径～0.5mmの礫が少量混じる)に、2 SY6/4/1灰青色～中砂が混じる
 23 1 SY5/1灰青色細砂層中砂～中砂 (径～0.5mmの礫が少量混じる)に、2 SY6/2灰青色細砂層中砂が混じる (径～1.5mmの礫が少量混じる)
 24 2 SY7/4灰色細砂～粗砂層～粗砂層に、SY8/2灰青色細砂～粗砂が混じる (径～1.0mmの礫が少量混じる)
 25 100Y7/1暗緑色～中砂と、7 SY9/5/6暗褐色～中砂～粗砂の層
 26 2 SY7/4灰色細砂～粗砂層～粗砂層に、7 SY4/1灰青色細砂シルトがブロック状に混じる (径～0.5mmの礫が多量に混じる)
 27 2 SY5/1灰青色細砂層中砂～中砂 (径～0.5mmの礫が少量混じる)に、2 SY5/2灰青色細砂層中砂が混じる (径～1.5mmの礫が少量混じる)
 (植物根巣が複数に見られる)
 28 2 SY8/2灰青色細砂～粗砂層～中砂 (透視程度が多量に範囲的に見られる)に、2 SY7/3灰青色細砂～中砂がブロック状で混入する
 29 2 SY8/2灰青色細砂層中砂～中砂 (透視程度が多量に範囲的に見られる)に、2 SY8/3灰青色細砂が混じる (波片が垂直に混じる) (植物根巣が複数に見られる)
 30 2 SY5/2灰青色細砂層中砂～中砂 (透視程度が多量に範囲的に見られる)に、2 SY5/3灰青色細砂層中砂が混じる (波片が垂直に混じる) (植物根巣が複数に見られる)
 31 SY6/1灰青色細砂層中砂に、2 SY6/1灰青色細砂層中砂～粗砂がブロック状に混じる (径～0.5mmの礫が多量に混じる)
 (土跡跡・須茎跡の跡片を含む)
 32 2 SY6/3/4灰青色細砂層中砂と、SY6/3/4灰青色細砂層中砂が混じる

第30図 3区西・南壁断面図 (S=垂直:1/50、水平:1/150)

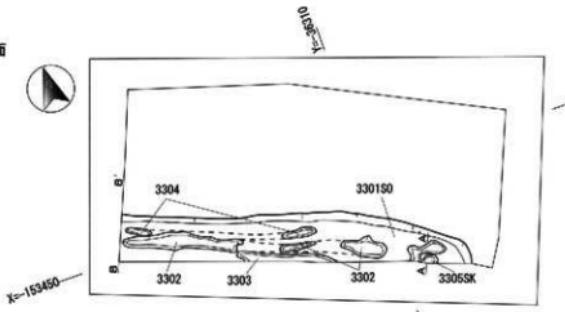
第1面



第2面



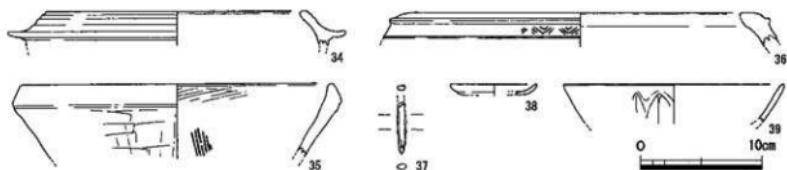
第3面



*造構名のうちSDについては造構略号省略

0 5m

第31図 3区第1～3面平面図 (S=1/150)



第32図 3101・3102 S O、3108 S D出土遺物実測図 (S = 1/4)

落ち込み(S O)

3101 S O (第32図-34・35・39)

調査区5 Iと6 I・J A地区で検出した落ち込み状遺構である。当該遺構は、南側に下がりながら調査区外に延びるが、調査区西壁及び南壁断面状況より、深さ0.3m以上を測るものと推測できる。2.5Y6/1黄灰色粗砂混中細砂に2.5Y7/3浅黄色粗～中砂が斑点状に混じる单一層の埋土をもつ。埋土の攪拌が顕著に見られることから、耕作などに利用されていたものと推測できる。

遺物は瓦質土器・青磁・瓦器・土師器・須恵器の碎片が出土した。このうち34・35・39を図化した。34は土師器の羽釜で、復元口径21.4cm、残存器高2.9cmを測る。時期は14世紀前半に比定できる。35は瓦質土器の擂鉢で、復元口径25.4cm、残存器高6.2cmを測る。時期は14世紀末～15世紀前半に比定できる。39は龍泉窯系の青磁碗で、復元口径17.9cm、残存器高3.2cmを測る。時期は14世紀末～15世紀前半(青磁IV類)に比定できる。

3102 S O (第32図-36・38)

調査区5・6 I地区で検出した落ち込み状遺構である。当該遺構は、調査区外にのびるが、調査区西壁断面の状況より、深さ0.13m前後の浅い皿状の窪地であったものと推測できる。10GY4/1暗緑灰色粗～中砂混細砂に植物根痕状に7.5Y5/2灰オリーブ色粗砂混中砂が入る单一層の埋土をもつ。埋土に植物根痕跡が観察できることから、耕作などに利用されていたものと推測できる。

遺物は、瓦質土器・瓦器・土師器・須恵器の碎片が出土した。このうち36・38を図化した。36は瓦質土器の奈良火鉢(浅鉢V)で、復元口径26.5cm、残存器高3.8cmを測る。時期は13世紀後半～14世紀初頭に比定できる。38は土師器の小皿で、復元口径7.0cm、器高0.9cmを測る。体部下半に稜線が見られることから、時期は13世紀後半に比定できる。なお、当該遺構埋没後に、3101 S Oを構築しており、若干の時期差が生じる。

溝(S D)

3103～3116 S D (第32図-37、第11表)

調査区5 I・Jと6 I・J地区で検出した耕作溝群である。ともに2.5Y4/1暗オリーブ灰色粗砂混中細砂に5Y7/2灰白色中細礫が斑点状に混じる单一層の埋土をもつ。全て南北方向に並列する。

遺物は、3103・3107 S Dから土師器の碎片、3104・3113 S Dから瓦器・須恵器・土師器の碎片、3106 S Dから土師器(羽釜など)の碎片、3108 S Dから土師器の碎片と鉄製の釘、3109 S Dから瓦器・土師器と瓦の碎片、3110 S Dから瓦器の碎片、3114・3116 S Dから瓦器・土師器の碎片がそれぞれ出土した。このうち3108 S Dから出土した37を図化した。37は鉄製の釘で、残存長4.3cm、

第11表 3区第1面耕作溝(SD)法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
3103 SD	5・6 I	2.50	0.30	7.0	3110 SD	5 I・J、6 I	(3.78)	0.40	7.8
3104 SD	タ	(4.40)	0.28	2.0	3111 SD	タ	(4.30)	0.24	6.9
3105 SD	タ	3.90	0.24	3.7	3112 SD	5 I・J、5・6 J	(3.22)	0.30	4.8
3106 SD	タ	(1.84)	0.30	2.4	3113 SD	6 I・J	1.94	0.28	9.0
3107 SD	タ	1.24	0.30	タ	3114 SD	6 J	2.20	0.20	7.3
3108 SD	タ	(1.49)	0.30	4.3	3115 SD	タ	2.14	0.26	4.1
3109 SD	5 I・J、6 I	(4.06)	0.28	9.8	3116 SD	タ	2.10	0.30	6.1

*()内数値は検出長及び検出幅 *表記の数値は最大値

重さ1.85gを測る。なお、埋土の状況や切り合い関係から、当該耕作溝群の廃絶時期は3102 S Oと同時期に比定できる。

・第2面(第31図、図版七・八)

第1面で検出した遺構埋土を全て除去したところ、第7b層上面で南方向に下がる落ち込み状遺構1箇所(3201 S O)を検出した。さらに、この埋土を全て除去したところ中世の土坑1基(3202 S K)、耕作溝4条(3203~3206 SD)を検出した。当該面で検出された耕作溝は、「南北方向」のものは東に、「東西方向」のものは南に20°それぞれ傾きをもつ。調査区北半分は、後世の土地利用によって第7b層まで削平されていた為、遺構は確認できなかった。調査区南半分に位置する遺構についても、中世期の遺物が多数出土していることから、本来はより上層部から切り込む遺構であったと推察できる。現地表面下約1.25m(T.P.+9.25m)地点に広がる。

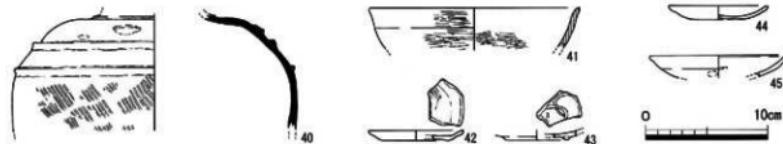
以下、当該面を「第2面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

落ち込み(SO)

3201 S O(第33図-40~44、第36図)

調査区5 Iと6 I・J地区で検出した落ち込み状遺構である。当該遺構は、調査区外に延びるが、調査区西壁及び南壁断面の状況より、深さ0.1m前後の浅い皿状の窪地であったものと推測できる。埋土の攪拌が顕著に見られ、植物根痕跡が観察でき、埋土除去時に下層部で多数の耕作溝(3203~3206 SD)が検出されたことから、耕作などに利用されていたものと推測できる。落ち込み肩部では獸骨の一部(獸骨①)が検出された。

遺物は瓦器(椀・皿など)・黒色土器(椀など)・土師器(羽釜など)・須恵器(壺など)の碎片が出士した。このうち40~44を図化した。40は須恵器の壺で、口径は不明、残存高9.7cmを測る。体部に貼り付け突帯を2条施し、外面に叩きの痕跡が顕著に見られることから、播磨系土器と推



第33図 3201 S O・3202 S K出土遺物実測図(S=1/4)

察できる。時期は11世紀後半に比定できる。なお詳細は44頁を参照されたい。41は黒色土器の碗で、復元口径15.2cm、残存器高3.4cmを測る。外面全体及び内面の下半に丁寧なヘラミガキを施す。時期は11世紀(黒色B類畿内系V類)に比定できる。42・44は瓦器の小皿で、それぞれ復元口径7.5cm・8.0cm、器高0.8cm・1.1cmを測る。時期は13世紀前半に比定できる。43は瓦器の碗で、口径は不明、残存器高0.8cmを測る。高台がかろうじて残ることから、時期は13世紀前半に比定できる。

土坑(S K)

3202 S K (第31・33図-45、第34図)

調査区5 I 地区で検出した。平面形態は径
0.55m前後のほぼ円形を呈し、深さ0.06mを測
る。埋土は単一層で、ブロック土が混じること
から、人為的に埋められたものと推測できる。
遺物は、瓦器(皿など)・土師器などの碎片が出



第34図 3202 S K 断面図 (S=1/40)

土した。このうち45を図化した。45は瓦器の皿で、復元口径11.1cm、残存器高0.8cmを測る。時
期は13世紀前半に比定できる。

溝(S D)

3203~3206 S D (第12表)

調査区5 I と 6 I・J 地区で検出した耕作溝群である。ともに5Y6/1灰色粗砂混中砂に2.5Y5/3
黄褐色細砂が混じる。少量の鉄分が沈着する單一層の埋土をもつ。全て東西方向に並列する。

遺物は、3204 S D から瓦器・土師器の碎片、3205 S D から瓦器・黒色土器・土師器の碎片、
3206 S D から瓦器(小皿など)の碎片がそれぞれ出土した。これらの遺物より、当該耕作溝の構築
時期は中世に比定できる。

第12表 3区第2面耕作溝 (S D) 法量表

遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
3203 S D	5 I	0.70	1.60	3.0	3205 S D	5・6 I、6 J	8.40	0.80	2.9
3204 S D	〃	5.46	1.90	2.8	3206 S D	〃	9.20	0.16	8.3

* () 内数値は検出長及び検出幅 * 表記の数値は最大値

・第3面(第31図、図版八)

第2面で検出した3201 S O 埋土を全て除去したところ、3201 S O 下部で南方向に下がる落ち込み1箇所(3301 S O)を検出した。さらに、この埋土を全て除去したところ耕作溝3条(3302~3304 S D)、土坑1基(3305 S K)を検出した。第2面と同様に、現地表面下約1.25m(T.P.+9.25m)地点に広がる。また、遺構から出土した遺物を観察した結果、本来はより上層部から切り込む遺構であった可能性が高く、遺構構築面が第2面構築時及びそれ以降に削平されたものと推察できる。

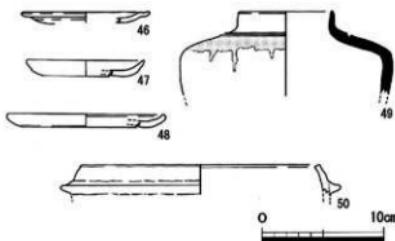
以下、当該面を「第3面」と呼称し、各遺構の概要を述べ、その詳細な法量については表などを参照されたい。

落ち込み(S O)

3301 S O (第31・35図-46~50、第36図)

調査区5 Iと6 I・J地区で検出した落ち込み状遺構である。当該遺構は、調査区外にのびるが、調査区西壁及び南壁断面の状況より、深さ0.5m以上を測る。埋土除去時に下層部で多数の耕作溝(3302~3304 S D)が検出されたことから、耕作などに利用されていたものと推測できる。

遺物は瓦器・瓦質土器(羽釜など)・土師器(小皿・羽釜など)・須恵器・平瓦の碎片が出土した。このうち46~50を図化した。46は土師器の小皿で、復元口径5.6cm、器高0.8cmを測る。口縁部形態は「て」の字状を呈す。時期は11世紀中ごろに比定できる。47・48は土師器の皿で、それぞれ復元口径9.6cm・12.35cm、器高1.2cm・1.0cmを測る。49は須恵器の壺で、復元口径7.6cm、残存器高6.9cmを測る。肩部に自然釉が見られる。頸部に2条の突帯が見られ、下部の突帯に沿って釉が溜まっている状況が確認できた。おそらく焼成時に他の土器を蓋状に重ねていたものと推測できる。時期は10世紀中頃に比定できる。50は瓦質土器の羽釜で、復元口径19.4cm、残存器高2.3cmを測る。京都型瓦質土器で、時期は11世紀後半に比定できる。



第35図 3301 S O出土遺物実測図(S=1/4)



第36図 3201・3301 S O断面図(S=1/20)

溝(S D)

3302~3304 S D (第13表)

調査区5 Iと6 I・J地区で検出した耕作溝群である。ともに10Y4/1灰色粗砂混中～細砂と、ベース層が攪拌する単一層の埋土をもつ。全て東西方向に並列する。遺物は出土しなかった。

第13表 3区第3面耕作溝(S D)法量表

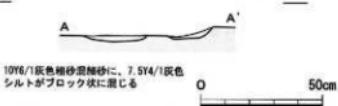
遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	遺構名	地区	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)
3302 S D	5・6 I	(8.05)	0.35	11.5	3304 S D	5・6 I	(5.56)	0.3	7.5
3303 S D	6 I	3.03	(0.15)	5.0	*	()内数値は検出長及び検出幅			*表記の数値は最大値

土坑(S K)

3305 S K (第31・37図)

調査区6 J地区で検出した土坑である。当該遺構は、上面遺構の3201 S Oによって上部が削平

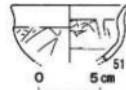
されており、詳細は不明である。残存する平面形態は不定形で、深さ0.02m前後を測る。埋土は単一層で、ベース層との攪拌が顕著に見られることから、耕作に関連する遺構であったと推測できる。遺物は出土しなかった。



第37図 3305 S K断面図(S=1/20)

・第7b層出土遺物(第38図-51)

当該層中にはほとんど遺物は含まれていなかった。図化した51は、調査区北半の第7b層中に埋没していた遺物である。51は土師器の小形の壺で、復元口径9.4cm、残存器高4.6cmを測る。調整は内面に板ナデ、外面にケズリが見られ、口縁部は横ナデで仕上げる。時期は8世紀後半に比定できる。



第38図 第7b層出土遺物実測図(S=1/4)

第4章 まとめ

今回の調査では、比較的土環境が安定している平安時代前期頃は居住域の末端地域として利用されており、平安時代後期以降から近代まで広く生産域として利用されていたことは明確である。当該調査地の土地利用の変遷は、調査地南西部に流れる長瀬川の氾濫と密接な関係をもつていたことが分かった。以下、各時期についての概要を述べたい。

平安時代前期以前

調査では、第7b層の堆積に相当する。当該層は、包含する遺物がローリングを受けており、調査地全域で確認できたことから、第1章・河川①を形成する河川堆積層に相当するものと考えられ、調査地一帯も、河川氾濫の影響を多大に受けていたものと推測できる。

平安時代中期～後期

調査では、ほぼ完形の遺物が廃棄された溝・土坑などを検出した。調査地を含む周辺地域に居住域が広がっていたものと推察できる。調査で建物に関連する遺構などが確認できなかった原因としては、当該遺構面が後世の土地利用によって全体に削平及び攪拌されていた為と考えられる。

鎌倉～室町時代

調査地では耕作溝・島畠・井戸など耕作関連遺構が広範囲にわたって確認できた。耕作溝が切り合った関係をもつ箇所が多く見られ、さらに3時期以上に細分することができることから、調査地一帯が、長期間にわたって、連続と生産域として利用されていたことが分かる。

近世以降

調査では、耕作溝・島畠・畦畔・井戸など耕作関連遺構が広範囲にわたって確認できた。このうち、調査地で検出された島畠の造成土に、氾濫堆積物の堆積は全く見られなかった。これは、造成方法に、溝を掘り下げた部分を水田面、掘り残した部分を島畠として利用する「地下げ」を取り入れたからである(註1)。今回の調査地は、旧大和川の主流である長瀬川に隣接する土地に立地しており、調査地一帯が大和川の付け替えの影響を受け(註2)、広く島畠として土地利用されていたことが推察できる。

特筆すべき遺物について

3区の3201S0から出土した40について、若干の考察を述べたい。

40は須恵器の広口壺または広口瓶とも呼称される器種である。肩部に2条の貼り付け突帯がみられ(特徴Ⅰ)、調整は外面に併行叩き後ナデ、内面に回転ナデが見られる。口縁部形態は、頸部上半部が破損している為、詳細は不明であるが、破損状態や、明瞭に屈曲する頸部の形状から、頸部が別作りの可能性が高い(特徴Ⅱ)。肩部には粘土を貼り付けようと試みた痕跡が見られる(特徴Ⅲ)。

特徴Ⅰに類似する資料としては、兵庫県三田市相野古窯跡(兵庫県教育委員会1992)や岡山県邑久村佐山東山奥窯跡(岡山県教育委員会1987)から出土した土器が挙げられる。前者の窯跡から出土した壺は10世紀前半～中頃、後者の窯跡から採集された壺は10世紀後半～11世紀前半に位置付けられる。また特徴Ⅱから、十瓶山窯産須恵器の一つである口頸部から底部まで叩き成形を基本とする「一連叩打技法」(吉岡康暢1994)の可能性は低い。特徴Ⅲは双耳の名残と考えられる。特徴Ⅰ・Ⅲから、播磨地域で10世紀から続く広口壺の系統と類似することは明確である。

以上から、当該土器の発見は、粗型となる広口瓶が10世紀代に相生窯(播磨)で出現し、神出窑・勝間田窯・邑久窯及び十瓶山窯へ11世紀後半に伝播する(佐藤竜馬1993)と同時期に、畿内にも伝播した可能性が示唆できる貴重な資料といえる。

【註・参考文献】

- 註1 (井上智博1998)によると、「調査地の第2～1面で検出した島畠の造成方法は、島畠作土の下に水田作土の堆積が見られ、この水田作土が島畠直下部の堆積土より高くなっている。」とあり、今回の調査で検出した島畠がこれに類似する。
- 註2 (八尾市1960)によると、「先年(1704年)大和川御川進以後、用水不自由、田高悉く稲作仕り候ては早損仕り候故、田毎に畔を築き、田床を下げ、用水を請け・・・」と島畠が表現されており、大和川の付け替え後、農業用水の不足から、田ができるだけ低くして水が溜まりやすいうように稲を育てていたと記されている(八尾市立歴史民俗資料館2002)。この記述から、18世紀には地下水型島畠が存在していたことが想像できる。

- 井上智博1998「V. 調査成果」「池島・福万寺遺跡 発掘調査概要XXI」(財)大阪府文化財センター
1999「島畠の考古学的研究－池島・福万寺遺跡の事例の再検討」「光陰如矢」「光陰如矢」刊行会
岡山県教育委員会1987「桑瀬はか/土佐貝塚はか/美土路遺跡はか 昭和61年度圃場整備事業に伴う確認調査」
金田章裕1993「大阪府八尾市福万寺遺跡の島畠遺構」「微地形と中世村落」吉川弘文館
佐藤竜馬1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」「関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢」
関西大学考古学研究室
兵庫県教育委員会1992「相野古窯跡群 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(XII)本文編」
廣瀬時習2007「池島・福万寺遺跡3 本文・考察編」(財)大阪府文化財センター
八尾市1960「亀井村等三か村額表、宝曆10年(1760)付」、「八尾市史史料編」
八尾市歴史民俗資料館2002「河内の綿作りと木綿生産」河内木綿関係資料集1
吉岡康暢1994「中世須恵器の研究」吉川弘文館
鍾方正樹2003「井戸の考古学」同成社

図 版

図版一
1区（第一回）



調査地遠景(南東から)



1区第1面全景(南東から)

図版一
1区（第2・3面）



1区第2・3面全景(南東から)



1区第2面1211鞋印検出状況(北から)



1区第2面1213・1214島嶼検出状況(北東から)



1区第2面宋銅①・1212SP検出状況(北から)



1区第3面1301～1316検出状況(東から)



1区第4・5面全景(南東から)



1区第4面1407S-E断面(南南西から)



1区第4面1407S-E曲げ物検出状況(南南西から)



1区調査区南壁断面(北東から)



1区東端部下層確認状況(北から)



1区第5面
1508SK・1509SD検出状況
(北東から)



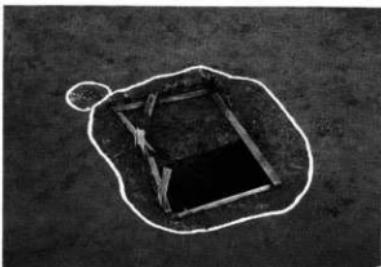
1区第5面
1508SK土器出土状況
(西から)



1区第5面
1509SD土器出土状況
(南東から)



2区第1・2面全景(南南東から)



2区第1面1120-①S-E断面(南から)



2区第1面2120-①S-E木枠検査状況(南から)



2区第2面2139 S-K断面(北から)



2区第2面2207 S-O断面(北から)



2区第3面全景(南東から)



2区第3面北半遺構検出状況(南東から)



2区第3面2306SK断面(北から)



2区調査区東壁断面(北西から)



2区中央部下層確認状況(北から)



3区第1面全景(東から)



3区第2面全景(東から)



3区第3面全景(東から)



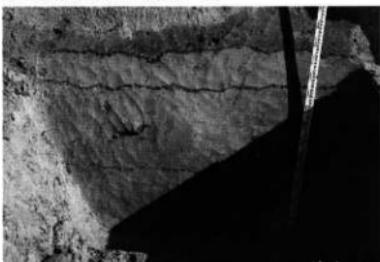
3区第2面3201S○獸骨①出土状況(南から)



3区調査区西壁断面(北東から)



3区調査区南壁断面(東から)



3区西端部下層確認状況(南南西から)

図版九
1区



1



11



2



3



12



6



13



7



14



8



—



4

1区第1層(1)、第2面(2・3)、第4層(4)、1407S E(8)、1508S K(11・14)、1509S D(12・13)出土遺物



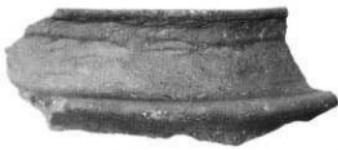
15



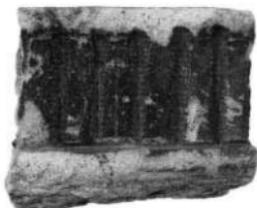
18



19



16



27



17



28



—



29

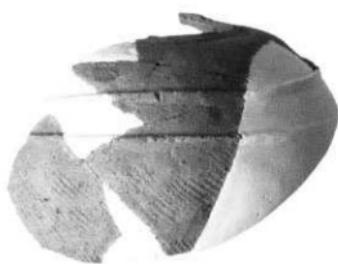


21

1区1508S K (15・16・18)、1509S D (17)、1504S K (19) 2区第2層(21)、2110S D (27)、2115S D (28)、
2207S O (29) 出土遺物



32



40



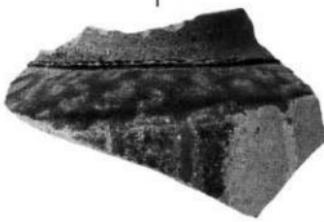
36



49



39



37



51

2区2315S D (32)、3区3102S O (36)、3108S D (37)、3201S O (40)、3301S O (49)、第7 b層 (51)出土遺物

報告書抄録

ふりがな 告名	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく120 財団法人 八尾市文化財調査研究会報告120
報告名	矢作遺跡（第7次調査）
卷次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	120
編著者名	河村恵理
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2008年12月26日

所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
矢作遺跡 (第7次調査)	大阪府八尾市安中町八丁目	27212	74	36度31分00秒	153度34分20秒	20071211 20080229	1104	住宅 建替

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢作遺跡 (第7次調査)	集落	平安時代	溝・土坑	土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・土鍬	・11世紀後半に播磨地域から伝播したと推察できる須恵器の広口壺(瓶)が出土
	生産域	中世	水田・井戸・土坑	土師器・瓦器・瓦質土器・曲げ物	
	生産域	近世以降	島畠・水田・井戸・杭路・土坑・噴砂	国産陶器・青磁・瓦・鐵製品・宋錢	

要約	平安時代前期：調査地一帯は大規模な河川氾濫の影響を受けた。 平安時代中期～後期：調査地を含む周辺地域に集落の存在が推定できる。 中世～近世：調査地一帯は連続と継ぐ生産域であった。
----	---

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告120

矢 作 遺 跡

第7次調査

発行日 2008年12月26日
編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 佛近畿印刷センター
〒581-0033 八尾市志紀町南二丁目131番地
TEL 072-920-3488
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>
図版 ニューエイジ <70Kg>

